ごねんごのすくみずはどんなかな

川鵜鶏肋 春屋アロヅ Fukapon なぎ Lagado

CREATURE MIXING

10 mnfikmyhk

Contents

私を海に連れてって 川鵜鶏肋 …… 02

Swimming Suit Battle 春屋アロヅ …… 48

魔法少女と魔法と少女 Fukapon …… 52

サイズオブスクール水着 なぎ …… 58

兎角亀毛 Lagado …… 60

もうすぐ冬ですね …… X3

今こそ買い！ 水着〇学生

mnfikmyhk

CREATURE MIXING 10

私を海に連れてって

川鵜鶏肋

口車に乗る、という言葉の意味が、生まれて初めて実感された。
やる気のある人材求む。南の島で迷惑生物を追い払うお手伝い。安全で簡単な仕事です。道具の使い方も一からレクチャーします。各種手当厚遇あり、保険完備。
商工会から回ってきたチラシのおいしい文句につられたのが運の尽き。
安全な仕事に保険完備なんて強調されている時点で怪しむべきだったのだ。各種手当、イコール危険手当に違いない。
「ばかばか私の馬鹿！」
口の悪い上司様の合図に従い、半泣きでＧ３小銃の引き金を絞る。目標は視界に入れたくもない。
「そこのパー子！」
「ひゃあい！」
こわぁい上司様の声が飛んでくる。
「撃つときに目をつぶるな！　それからいちいち悲鳴を挙げるな！」
「ごめんなさーい！」
「だからロを開かず目を開け！」
だって、自分の作った死体など見たくない。
「馬鹿野郎、目をそらして敵が殺せるか！」
追い払うだけって言ってたのにー！
虫殺すのも薬物専門で、どっか見えないところで死んでくれるのを期待なのに。
武器をつかって直接手を下すなんて。
「こんなのわたしのキャラじゃありませんって！」
「殺されたくなけりゃ、こっちが先に殺すしなかないだろう！」
「石丸さーん！」
童顔に似合わず発言の殺伐とした上司に、無駄を承知で苦言を呈するが、
「いいから撃て！　撃ちまくれ！　いいから目を開けて状況をよく見てみろ！」
無駄だった。
怒声に後押しされるように恐る恐る目を開けるが、
無駄だった。いろいろと。
「だいたいアレ死んでませんよ！」
頑強な殻に包まれた迷惑生物の群れは、猛攻にもたえて絶賛侵攻中。
「だから死ぬまで撃ちまくるんだ！」
石丸さんの身振りによる合図で、ライフルに取り付けられた４０㎜グレネードが一斉に発射され、敵陣真っ直中で炸裂。数十本の水しぶきが上がる。
「今だ、撃て！」
体勢を崩したところに一斉射撃。迷惑生物（というかどうみても危険生物）のうちの何体かが動きを止める。
「いいぞ、ロケットか対物ライフルなら薄いところなら抜ける。同じところに二発当てればＮＡＴＯ弾でもいけるな」
「それどんな確率ですか！」
「そこらへんは手数でカバーするしかないな」

「その数でも負けてるんですけどー！」
横陣をなし、浜辺に向かって脚を進めてくる。三メートルばかりの巨大なヤシガニを思わせる危険生物は、ぱっと見ただけでも数百体はくだらない。
対して、迎え撃つこちらはわずか一個中隊。
今のままの効率では、数分以内には上陸を許す事になるだろう。
接近戦であんなのに太刀打ちできるとは思えない。
「手持ち武器でどうこうできる範囲を超えてる気がしますけど」
この状況で必要なのは装甲貫徹力と瞬間的な広範囲制圧力。
「出来れば近接航空支援か、例えば……例えば自己鍛造弾頭積んだＳＡＤＡＲＭを、１５５㎜榴弾砲かできればＭＬＲＳで撃ち込めば」
「そんなものがそうそう持ち込めてたまるか。これでもかなり無理をして……詳しいな」
「いえ、ミリオタな兄の受け売りですけど」
別に専門家でなくてもそのぐらいは想像できる。
先ほどから撃ち込んだ銃弾の大部分は、頑丈な甲殻に弾かれて金属音と火花を残すばかり。正直、あまり効いているようには見えない。
しかもヤシガニ（仮）の動きはおそろしく素早い。速度の遅いロケットや連射の効かない対物ライフルで薄いところを狙い撃つのは困難だ。
「確かに。これではらちがあかんな」
既にピンチといってもいい状況にも動じた様子のない上司様の発言に、同僚達の視線が集まる。
皆一様に釣り人っぽい格好はしているが、手に手に持っているのは小火器類。ロッドケースがこれほど偽装向きとは思いもよらなかった。
そんなコワモテのごついオジサン達の視線は、百戦錬磨の石丸さんならきっと何とかしてくれるだろう、という期待に満ちていた。
石丸さんは余裕を崩さぬ自信満々の態度で、
「よし、頼む」
と、千羽（ちわ）の肩に手を置いた。
それとともに、皆の視線が一斉にこちらに移動してくる。
「そう。彼女こそ我々の切り札、赤枝（あかえ）の巫女。本質的に人に仇為す鬼憑きとも、微力な呪術とも違う、本当の意味での人間の味方だ」
一瞬、何を言われたのか分からなかった。
ほどなく、理解が追いついてくる。
「いやいやいや石丸さん、それ買いかぶり」
痛い！　痛すぎ！
根拠もなく美辞麗句で持ち上げられても困ってしまう。
「わ、私に何を期待してるんですかっ!?」
見てよこの期待しまくった顔、顔、顔。
「一発逆転」
「神風」
「マップ兵器」
「そういうの出来るんしょ？　チハたん」
「無理無理無理！」
あとドサクサでチハたんとか呼ばないで欲しい。
「赤枝家のみんながみんな千綾さんや千景ちゃんみたいな天才じ

やないんです！」
　ましてや、こんな戦闘に使えるような技術なんてとてもとても。
「またまた謙遜を。どうせかなり使えるんだろう」
「あと二回ぐらいは変身を残してたり」
「赤枝って斗流十家からも一目置かれる戦巫女の家柄って聞いてるぞ？」
「神の力を借りるとか、もう神そのものを招来とかできるんだろう」
　勝手なことを言ってくれる。又従姉妹の千緋（ちあき）ちゃんを例に引くまでもなく、呼べるのとコントロールできるのはだいぶ違う。
　そもそも、
「ＤＮＡの効果には個人差がありますっ！」
「いや、でも、少しぐらい何か出来ることがあるだろう。奴らの意外な弱点を的確に見抜くとか」
　石丸さんが食い下がってくるが、
「今この場で役に立つようなことは、これっぽっちも！」
　断言してやった。
「私には神様の声なんか聞こえません。植物の声で精一杯です」
　それで、皆の態度が露骨に変わった。
「隊長、ハズレ引いたっしょ！」
「使えねー！」
「やっぱりパー子なのかよ」
　ろくに目的も言わずに引っ張り出してみれば、一族の落ちこぼれだったといったところか。
　確認不足を棚に上げて勝手なものだ。
「おまえら言い過ぎだぞ」
　逆ギレの集中砲火の中にも、千羽の味方がいた。一人でも二人でも、嬉しい。
「マスコットとしてはなかなかのものだと思わんか？」
「そうだ、チハたんを悪く言うな」
「どうもありがとうございますほんと光栄の至りですわーいうれしいな」
　期待した自分が馬鹿でした。駄目だこいつら、早く何とかしないと。
「この際見た目は何の役にも立たん。使えないものは諦めるしかないな。とりあえず射撃再開！」
「諦めないでー！　誰かどうにかしてよ、あのヤシガニの大軍を〜！」
　痛みとか恐怖心とか、それに類する感覚が無いのだろうか。危険生物の群れは味方の損害にも速度を変えず、今この瞬間も砂浜に向かって侵攻を続けている。
「仕方ないな。おい真田」
　無線機を背負った隊員が、石田さんに駆け寄って背を向ける。
「アニスアルファリーダーよりＨＱ」
『こちらＨＱ。アニスＡ、何があった？』
　石田さんに応えたのは、冷静沈着な声。
「足止めに徹してはいるが、絶対的に火力が不足だ。近接航空支援を要請する」
『駐留米軍とは現在交渉中ですが、残念ながら今のところ色よい返事は得られておりません』
「このままでは上陸を許すぞ。装甲目標を小火器では止められん」
『こちらウィザード』

突然、通信相手が替わった。
まだ幼いと言っても良い、少女の声だった。
『ここで焦って予備戦力は動かせないが、限定的な支援攻撃ならば可能。精度には期待できないが、それで構わないならおおよその座標を伝える』
「感謝する。エリアNW（ノーベンバーウィスキー）、ゾーンJ（ジュリエット）9－12を狙ってくれ」
『着弾予想時刻は二分後。着弾地点はおよそG（ゴルフ）6－M（マイク）15間。可能な限り水辺から距離をとること』
「アニスリーダー、了解」
通信を終了した石田さんの額には、汗が伝っていた。
「あの、石田さん？」
おおよそって何？
「総員後退！　全速力で波打ち際から離れろ！　お前もだパー子！」
「ふぇっ!?」
手首をつかまれた、そのまま防波堤上を全速力で駆け出す石田さんに、引きずられるようにしてついていく。
「とにかく走れ！　死にたくなければな」
「ふ、ふぁいっ！」
本当に榴弾砲か多連装ロケットでも持ってきているのだろうか。
しかし、下手をするとセンチメートル単位で制御できる現代兵器の着弾精度がそこまで大雑把とは思えない。海中の相手を狙って浜辺まで巻き込むなど考えにくいのだが……
「伏せろ！」
「ぶはっ」
覆い被さるように押し倒され、灼けた砂浜に押しつけられる。
「何を……って、えっ？」
その直前、真っ赤に赤熱した何かが遥か頭上を横切っていくのが見えたような気がした。

G島駐留部隊の司令官、J少将は顔を真っ赤にして唸っていた。
「知事閣下の抱き込みには成功したようだがな、我々はそうはいかんぞ。我が合衆国の国土をわずかなりと損ねることはならん。それが彼女の上陸を許可する条件だったはずだ」
『まったく、まさか隕石が一度に三つも落下とは驚きましたが、お互い人的損害が無かったのは不幸中の幸いでしたね』
電話の相手は流暢な英語で、さも気の毒そうに言う。
「何をしらじらしい」
偶然であろう筈がない。彼はそう信じていたが、常識的に証明できねばどうしようもない。
『とは仰いましても、自然の流れ星ですしねえ。スペースコロニーなら人為的って事もあるかもしれませんけど』
「君が言うとおり、アレがまったくの偶然だとしてもだ。いきなり連中と交戦とは何事かね」
『仕掛けてきたのは向こうですから。生徒の安全に対する責任がありますので。あらゆる危険は我々の手で排除すると申し上げた筈です』
「まるで蜜に群がるアリだな。こちらにまで目をつけられてはかなわん。さっさと君らを拘束してつまみ出すのが、一番手っ取り早いとは思わんかね」
『いかに同盟国といえど、無体な為しようには、精一杯抵抗させ

ていただきますが』
「脅迫する気かね？」
『彼女が奪取されれば、マリアナ諸島そのものがルルイエに変えられかねません。ひとたび上陸を許可した時点で、私達は運命共同体なのです。それでは、ごきげんよう』
「……女狐めが」

「さっきの音、凄かったねー」
「隕石だってさ、ほら速報出てる」
ホテルのロビーで大理石の柱を囲んだ一団が、スマートフォンのニュースに見入っている。
「あの金髪すげー」
「ダイナマイトだよな」
「生徒会長殿と大差ない気もするぞ。むしろ顔じゃ南山が勝ってるだろ」
「言うな。せっかく外国来た気分を満喫してるんだから」
「……すまん。少なくとも愛想では間違いなくこっちが勝ちだな」
「うひょー、ウインクしたぜ！」
日本人離れした体型の美女に微笑みかけられて有頂天になっている、別の一団もあり。
そして、ある柱の周りでは数人の教師達が、各部屋にチェックインした生徒達の再集合を待っている。
「けっ。手を出すつもりも手を貸すつもりも無しか」
と、陸奥十悟はぼやいた。
ひょろりとした長身に丸めがね。短く刈り揃えた頭髪。明治時代の書生然とした容姿だが、軽薄なアロハシャツに半ズボンがどうしようもない胡散臭さを醸し出している。国語教師には見えない。
「予定通りよ。邪魔さえしないでくれれば十分」
と、社会科女教師の新川さおりが、いかにも彼女らしい不敵な笑みを浮かべる。
いつもと替わらぬボブカットにオシャレメガネ、暗色のパンツルック。小柄だがメリハリのある体型ながら、色気もなければ南国らしさの欠片も感じさせない。
「なあ、本当に大丈夫なのか、篤史達も宮藤の双子も置いてきちまって？」
「珠坂を無防備にするわけにはいかないでしょう。そのためにわざわざ黒いのを六チームまで引っ張ってきたのよ、覚醒が不完全でも戦力的には十分アテになるから。それに、教師としての立場で言わせてもらうなら、あの子達が受験生だって事を忘れてもらっちゃ困るわ」
「お前さんがそう言うんなら大丈夫なんだろうけどな……看板娘全員休みじゃあ、喫茶店は当面開店休業か。羽仁さん気の毒に」
「海抜１５０ｍまでもれなく水没するよりはマシでしょ」
「……最悪の場合、だろ？」
「少なく見積もっても、よ」
「勘弁してくれい……」
文字通り頭を抱える十悟。生徒達の前でなければ失意体前屈に至っていたところだ。
「それにしても、主力を一切動かさずに陽動を撃退したのは予想外。むしろ指揮能力に期待していたんだけど、予想以上の拾いも

のだったって事かしら」
「ってえと、あのやたら偉そうな子供の事か。飛成(ひなり)とかいう」
「ああ見えて伝説級のスーパーハカーなんだけど、文字通りのウィザードでもあったってこと」
「……ってえと……っ！」
不思議そうな表情が、戸惑いに、そして心底嫌そうなそれへと変わる。
「リングが映画化されるまでは世界一有名だった、アレかよ」
らしくもない察しの良さを発揮した十悟が、今度こそORZポーズに陥る。
「国文学専攻の十悟でも知ってたか。そりゃ強力なわけだわ」
「正直、俺には専門外のさらに埒外なんだが、そんなもんなのか？」
一人で納得した様子のさおりに対し、十悟はあくまでも胡散臭げだ。
「私も本職は脳外科なんだけどね。でも、精魂工学の専門家であるアリスの言葉を借りるなら、魂ってのは個々に独立した存在じゃないそうよ。不可分なまでに連なりあって重なり合った巨大な回路が、インタフェースごとに便宜的な魂の単位と見なせているだけ。集合無意識論に近いのかもね」
「はあ？」
リピートを求める気にもなれない。聞き取れたからと言って理解できるわけではなろうし、詳しい解説されるのも願い下げだ。
どうせ、さおり自身、十悟にきちんと理解させるつもりもないのだろうし。
「彼女の理論によれば、神の性質さえ信仰の影響を受けるものらしいから。空想上の存在もまた人々の思いから魂を得るってね。いや、それだと神も同じか。くっくっく」
いかもに日本人らしい不敬きわまりない発言に自ら突っ込み、ウケて含み笑いを漏らす。
この幼なじみはいつもこんな具合だ。自己完結してしまっている。
本来彼女に相談相手など要らないのだ。会話の体裁をとってはいても、自らの思考を整理するために口にしているだけ。
こういうところは子供の頃から全然変わらない。
「つまり、英雄だろうがバケモノだろうが、人口に膾炙した伝説中で強大な力を誇る存在が実体を得たなら、それ相応の自然干渉力を発揮しても不思議はないって事になるわ」
だいたい分かった。最初からそう言うべきなのだ。
「魔法使いで隕石が落ちてくるなら、鳥山某のマンガのキャラとか出たら恐ろしいことになりそうだな」
「今まさにラブラブ工作センセイの邪神様がおいでなすって、本格的に恐ろしいことになりそうなわけだが」
「……よーくわかった」
かくいう十悟やさおりも、斗流十家の血を媒介に発現する星鬼と呼ばれる存在の力を借りられる。十悟が扱えるのは『巻舌(けんぜつ)』なんてマイナーな鬼であるから、能力の程は子供だましに毛が生えた程度だが、それでも超自然的な現象を引き起こせるのは間違いない。
直接的な危険性の程度で言うならば。宮藤家の双子が宿す炎の星鬼『師門(しもん)』が、一瞬にして珠坂の街を数キロメートルにわたり更地に変えたのも、あやうく彼女らのコントロールを離れかけた

のも見ている。
さらに悪いことには、さおりの従妹にして斗流宗家たる新川詩紀が宿すのは、北斗七鬼の頭『樞』。
名前の韻だけで伝説の魔法使いが顕現し、フォマルハウト繋がりで炎の邪神さえ召喚されうるなら。詩紀の宿すそれが、頭足類っぽい邪神様に繋がるのは想像に難くない。
そして、さおりの語った理屈によれば、大先生の小説がノンフィクションでも妄想でも大差ない。ひとたび属性が絡んでしまえば、顕現した際の危険性は大先生やその後継者達の記述に迫りうる。
幸いな事に現時点では詩紀の中の樞は覚醒に至っていないが、凶悪な半魚人の群れが、主筋に当たる詩紀を迎えんと珠坂まで川を遡上し押し寄せるという事件が既に発生している。それだけでも人間にとっては十分脅威といえるし、彼らとの接触が切っ掛けとなって樞が覚醒する可能性もあるだろう。
つまり、核兵器の直撃にさえ耐え、常人なら一目見ただけで発狂レベルのバケモノが世に放たれかねない。
「どうしてそこまでのリスクを冒してまで、わざわざこんなところまで修学旅行なんかに連れて来てるか。納得いく説明をいただきたいものだな」
邪神様の本拠地ポナペ沖からは距離があるとしてもだ。
ここもまた南の島。周りは全部海。世界の海は一繋がり。水の怪物達から身を守って立てこもる場所としては最悪だろう。
実際、いつぞやの半魚人に数倍する戦力の海生生物たちが上陸をはかりつつあり、密かに詩紀の警護に当たっている『楢』の一群がリアルタイムで交戦中であったりするわけで。
戦争始められたり、あまつさえ魔術戦で隕石なんぞ落とされては、現地の人々にとっても迷惑きわまりない話。島の防衛に責任を持つ司令官殿の機嫌が悪くなるのも当然だ。自分の国でやれ！って言いたかろう。
「ん、紀ちゃんの彼氏様のご意向。正確には、脅迫されたというべきかしら」
十悟は首を捻る。
「すまん。上手く聴きとれんかった。もう一度言ってくれるか。一介の国語教師にも誤解無く理解できるように。かみ砕いて、わかりやすく頼む」
『『女学生一人の日常さえ守れないような国なんて、滅び去ったところで仕方ありませんよね』って言われた」
さらりと告げられた台詞の意味を理解した十悟は、今度こそ蒼白になり。ついで羞恥に染まった。
「無茶苦茶だが、至って正論だ。いっそ清々しいほどだな」
と、自嘲含みの引きつった笑みを浮かべる。
「あいつら、お似合いすぎだ」
「まったくね」

島の中程西岸にあるＩビーチ公園。
白い砂浜。椰子の木。青い珊瑚礁。溢れる日差し。はるか遠くに見ゆるは恋人の名を持つ岬。
波打ち際に向かって駆け出す、水着姿の少年少女達。
その先頭を切るのはずば抜けて小柄な少女。
色素の薄いふわふわの猫っ毛をツインテールにくくり、身につ

けているのは黒地に白の猫の足跡柄のタンキニ。軽やかな身のこなしも、どことなく猫を彷彿させる。
やや遅れて続くのは、ペンギンの着ぐるみを着こんだ少女。水かきのある大きな足と丸っこい身体つきからは信じられないほどのスピードで、砂塵を巻き上げつつ砂浜を突っ走る。
着ぐるみの頭部分からは同じくツインテールが飛び出しており、開いたくちばしの間からはタンキニ少女と同じ顔が覗く。違いといえば右目の眼帯だけ。
「ヒャッハー！(>▽<)」
タンキニの少女が跳び蹴りの体勢で気勢（奇声？）を上げると、
「汚心は消毒だ～っ！(□△□)」
右のフリッパーを力強く突き上げ、淡々とした声で着ぐるみ少女が応える。
「「か、可愛い～！」」
「ヤヴァイ、ヤヴァすぎる！」
可愛いもの好きの女生徒達と、一部の特殊な趣味の男子生徒達を釘付けにしつつ、異常なテンションで暴走を続ける双子。
「諸君、私は南の島が大好きだ！」
「よろしい、ならば海水浴だ！」
そして、生徒達の反応も、二人に呼応するように盛り上がっていく。
「カワイイカワイイカワイイカワイイ！」
「なんだか分からんがとにかくイイ！」
異常な雰囲気に冷水を浴びせるように、落ち着いた声が掛けられる。
「綺麗な海見て浮かれるのも分かるけど、ちゃんと準備体操はしといた方が良いよ。リンリン・ペンペン」
「おう、来たかナナちゃん」
「待ってたホイ」
テンションも服装も正反対にもかかわらず、相変わらず呼吸がぴったりの双子。
線の細い少年は、頬を掻きつつ苦笑する。
「ペンペン、それ暑くないの？」
「結界魔術で耐熱対爆対ＮＢＣ。冷却も完璧」
右フリッパーでびしりとサムズアップ。
「そんな変なもの作るのはさおりさんだな。着る方も着る方だけど」
ナナと呼ばれた少年はといえば、シンプルなトランクス型水着にパーカーを羽織っている。
「って、どんだけ……」
口を開けて固まる者。熱い砂浜に両手と膝をつく者。頭を抱える者。
「あたしら女の立場ってどこに」
「ありえんし」
「犯罪だろこれ」
「いやむしろこっちが犯罪に走りそうハァハァ」
「エロい、エロすぎる」
「誰かレインコートでもかぶせとけよ」
賛辞とも苦情ともつかぬ呟きは、くだんの少年の耳には届かないのか。
それとも、慣れきって無視することにしているのか。
双子の中学生に左右からとびつかれてしまっては、それどころ

ではないのか。
「あの……この暑いのに何やってんの？」
「「美人オーラ充填中」」
「そういうのは詩紀ちゃんとかの方が御利益ありそうだけど……」
苦笑しつつも、二人に好きなようにさせているナナの目は慈愛に溢れていた。

「かーっ、あの状況であの余裕！」
「日常なのか、日常茶飯事なのかっ？」
「悔しいけど絵になる」
「聖母子像だよねー」
「なぜかペンギン居るけどな」
海にも入らず、遠巻きにして手に汗握るギャラリー。
「つうか、あれ中等部の子達だろ。なんでうちらの修学旅行にいるの？」
「七瀬のリン・ペンといえば神出鬼没の暴風姉妹だ。あいつらのやることに意味なんかあるか。詮索するだけ無駄無駄。ここは無心で観賞するに限る」
「さすがはロリな人。無駄に詳しいな。俺はむしろああいう方が興味だが」
「……見た目だけなら、な」
彼らの視線の方に興味を転じてみれば。
燃え上がるような赤毛に合わせたような、シンプルデザインの真っ赤なビキニ、同色の麦わら帽。サングラスに白いステッキ。
彫りの深い顔立ちに、惜しげもなく晒した長身かつメリハリのあるボディー。
年齢的には少女と言うべきなのだろうが、あくまでも堂々としたその佇まいは、絵に描いたような「美女」っぷりだった。
「ん」
その彼女が眉を寄せるや、傍らに立つ学生服の少年が、すかさずサングラスを差し出す。
「ほいリサ。五番アイアンだな」
「ありがとう」
リサと呼ばれた少女はサングラスを交換すると、騒ぎの中心部を見やり、口の端を吊り上げた。
「ふうん、あの方が噂のしゃ子の大事な人？」
少年とは逆サイドに立つもう一人の少女を見やり、からかうように言う。
「あれ、放っておいてよろしいの？　それとも、余裕なのかしら？」
「ふっ」
鼻で笑って切って捨てたのは、赤毛の娘とはまた別の意味で美しい、繊細な作り物のような容貌の娘だった。
「愚問ね。人間の操る語彙で言い表せるような底の浅い関係ではないから」
流れるに任せたストレートロングのプラチナブロンドに菫色の瞳。長い手足と華奢な肢体。
名のある人形師の手による活人形、あるいは妖精とでも形容すべきだろうか。燦々と輝く太陽の下よりは、雪景色の方がよっぽど似合うに違いない。

ただ、レモンイエローの可愛らしいリボンつきビキニは、彼女の冷たい印象をやわらげるのにそれなりに寄与しているようだ。
「それに、ナナの『九州珠口』は通訳の星鬼。海外旅行で妹分に貸してあげたぐらいで罰は当たらないと思うわ」
「ホテルもその辺の店も、日本語思いっきり通じてる気がするけど……っ！」
どすっ。
学生服の少年をかすめて椰子の実が落ち、鈍い音とともに砂にめり込んだ。
「ツッコミにキレたぐらいで偶然に干渉するな！　こんなん当たったら命に関わるだろ！」
「それは生きている者だけが口にしていい台詞」
「う……」
またもばっさり。少年の表情が大袈裟に引きつる。
「うわぁん、リサえもぉーん！」
「よしよし、怖かったんだね詠人くん」
だみ声を作り、泣きついてきた少年の頭をリサが撫でる。
二人とも、実にわざとらしい小芝居だった。
「あなたたちこそ、相変わらず仲がよろしくて大変結構」
「サービスの依存関係上仕方ないだけだ」
「詠人さんの場合、詩紀の彼氏さんのように取り立てて見栄えが優れているというわけではありませんし」
軽口を軽口で返した、といった感じの会話だったが、
「なん、だと？」
少年の表情の変化には、今度はわざとらしさは含まれていなかった。
「あんな綺麗な子が女の子の筈がないっ！」
「……そこに引っかかるのね」
銀髪の少女は少しだけ感心したように言う。
「大いに語彙矛盾してますけれど、詠人さんが仰らんとすることは理解できる気がしますわ」
双子の中学生と戯れている人物はどこから見ても男の格好をしているにもかかわらず、これでもかという「美人さん」オーラを放っている。
海水浴モードでなければ、十人中九人までが自然に女性と信じて疑わないだろう。
「ったく非常識な容姿だよな。うっかり惚れてから男だって分かったら、ショックなんてもんじゃないぞ！」
「親友の彼氏があまりにも愛らしすぎて『うほっ』に走りかねない。あたかもライトノベルのタイトルのようね」
「そんな陳腐な関係ではないと何度言えば」
詩紀の否定の言葉に呼応して、再び落下してくる椰子の実。
「なんで無実の僕を狙うかね！」
詠人でなければ、下手すれば命に関わっているところだ。
「そんな細かいところまで意識して制御できるわけではないから。潜在意識のなせる業かしらね」
彼は新川詩紀の為人を熟知していると思っていた。この妖精じみた外見の中身がどんなヤツかはよーく分かっていると……思いこんでいただけかもしれない。
表面的にはともかく、「心底嫌いだ」と解釈されかねない発言ができるとは。
「細かくねえ。あと、『心底嫌いだ』って聞こえるんだが、気の

せいか？」
「たぶん気のせいではないわ。たぶん気のせいではないわ。大事なことなので二度言いました」
　実に容赦ない。
　こうして久々に直接会ってみると、記憶の中よりさらに強烈になっていた。
「彼氏も彼女も非常識だなおい」
「直射日光の差す南国のビーチを平気でうろついてる幽霊こそ非常識ではなくって？」
「あんたに憑いてるんだから仕方ないだろ！」
　雇い主もまた、詩紀とつるむと常日頃より容赦なかった。混ぜるな危険。
「文字通り影が薄いのはともかく、せめて服装ぐらいはＴＰＯに合わせるべきだわ。制服、しかも冬服なんて不自然すぎる。それから」
　詩紀嬢は右手の人差し指をぴっと立てて、
「もう一つ若干不自然なことが。学校の違うリサやハチがここにいるのも、ちょっと奇妙だと思わない？」
　さしものリサも、この台詞には反応が送れてしまう。
「しぃ子が普通に集団生活を送れているなんて信じられないと、かねがね気にはなっていましたから。五ヶ瀬さんからお誘いを受けたのを幸い、紫城の修学旅行にあわせて個人的に遊びに来てみたのですけれど……何を今さら」
「……どの口が言うか、不自然の根源」
「ナナが？　リサを？」
　詠人のツッコミは、詩紀によってあっさり流される。
「返答の如何によっては粛正の対象になりうるものと憶え置くように」
　言い放つ威厳は妖精の女王のそれで。
　これは洒落ではすまされなさそうだ。と少年幽霊は緊張する。
　先ほどの椰子の実のような物理的な打撃ならまだしも。彼女の言うところの粛正とやらが、霊体なら安全とたかを括れる類のものと考えるのは甘すぎるだろう。
「もともと俳諧サークル繋がりで、ずっとオンラインの付き合い。オフで会って、しぃ子の関係者だって知ったのは少し前」
　リサの口調も不自然になっている。サングラスで表情を読ませないものの、明らかに焦っていた。これは相当に珍しい。まさに差し迫る危険を感じている証左。
「じー」
　菫色の瞳が、二人の顔を交互に見つめる。
　少しでも後ろめたさを憶えたりあるいは目をそらしたら、即死……で済めば御の字か。
　この世に生を受けた事実自体を抹消されたり、あるいは小動物だったことにされても不思議はない。
　きっと冗談なのだろう。でも１００パーセント冗談だと断定できるだろうか。
　本拠地である珠坂の地を遠く離れた南の島でもそこまでの力が使えるかどうかは分からないが、自分の運命をチップに試してみる気にはなれない。リサにしても詠人にしても、それは偽らざる本音だった。
　いやな数秒が過ぎた後、ふと緊張が緩む。
　ものすごくいい笑顔で、詩紀サマはのたまわった。

「嘘はついていないようね。おめでとう。執行猶予つきよ。首の皮一枚で繋がったわ」

心情的には無罪放免が順当だが、不当判決だと思っても口に出せるものではない。

それに、ある意味では二人は罪を犯している。

彼女に多少なりとも不安を感じさせる、ただそれだけの事でさえ、人類存亡に関わる大罪なのだから。

安南家を直接訪れた五ヶ瀬七夏は、二人にそう語った。

新川詩紀の抱えている『樞』という爆弾は、取り扱いにそれほどの注意を必要とする。魔王の蛹は夢見ながら覚醒の日を待ちいる状態であっても、人間にとって十分以上の脅威。テロリストの手にある核兵器より遥かに危険性が高い。

七夏や七瀬の双子が常に近くに居られればいいが、学校行事で四六時中キャッキャウフフしているわけにもいかない。それに過去の行きがかり上どうしても詩紀に負い目を感じさせてしまう彼らとばかりいては、本当の意味で楽しんではもらえないに違いない。というのはあくまでも七夏の弁で、リサ達から見ればこの辺りには疑問があるが、そこは置いておく。

最適任である詩紀の付き人宮藤終やその姉初、それから義理の兄である篤史氏は珠坂を離れられない。そこで白羽の矢が立ったのが、中学校自体からの親友であるリサだった。

七夏は女顔の華奢で頼りなさげな少年だが、こんなめんどくさいのと真っ向から向き合っている。決して世界を守っているわけではなく、罪滅ぼしでもなく、ただただ語るもこっぱずかしい愛とやらの為せる業なのかもしれないが……曲がりなりにも友といえる自分たち以上の理解者として彼女を支えてくれるのならば。それだけで信頼と尊敬に値する。安南リサと白須詠人はそう感じていた。

「それはそれとして。こんな大切なことを黙っていたナナには、それなりのお仕置きが必要ね」

詩紀の少し弾む声に、本気でガクブルしたのもまた確かだったが。

「HQよりC島、アニスブラボー。警戒中の米軍より情報提供あり。領域内に侵入者あり。C島西方より巨大潜水艦急速接近中。至急確認乞う」

『C島、アニスBリーダーよりHQ。今のところ視認不可能……いや、沖合にアンテナ、いや、セイルか？』

「HQよりアニスB。米軍および同盟軍に該当艦艇なし。交戦許可を与える。武器使用自由」

『……ああ、自分の目が信じられんが、見えたものを素直に言う。白く光る三角の背びれ。恐ろしく巨大だ。あれがサメなら本体はクジラほどある』

「HQ、ウィザードよりアニスリーダー。絶滅種の古代鮫、ムカシオオホホジロザメの鬼化体と推測される。これまで観測記録はないが、ここは深みのモノの一員として対処すべき。ともなくビーチに近寄らせないこと。より小型の鮫類や護衛の半魚人にも注意なさい」

『いくらなんでもでかすぎる！　普通の鮫やら半魚人はともかく、あのデカブツに手持ち武装では対処困難。至急支援を乞う。米軍の手は借りられんのか？』

「姫さえ確保すれば帰るとふんで米軍は様子見。まるでアテには出来ない。鬼化による強化がどこまで及ぶかにもよりますが、基本的に肋骨を持たない軟骨魚類は衝撃に弱いはず。積極的に水中爆発を利用しなさい。それから、エクスカリバー投入を許可します」

「背びれに注意！　手前を狙って落とせ！」
「了解！」
水面上にほとんど姿を見せぬまま海岸へと迫る危険生物群に対し、『樒』Bチームの水上バイク群からグレネードランチャーが一斉発射され、海面を沸き立たせる。
海水に血の色が混ざり、背びれのいくつかが姿を消す。
「効いてるぞ、第二射行けるか！」
「はいっ！」「行けます」
「よぉし、撃てーっ！」
再び擲弾が海面に落下。
「やったか⁉」

「左舷段幕薄いよ、何やってんの！」
右拳をうち振りながら、飛成麻緒（ひなりまお）は低めの作り声で叫んだ。
「そっちは陸側だから」
空気の読めてない相棒、炬紗也（かがりさや）が、並走する水上バイク後席から淡々と突っ込んでくる。
どちらかといえば小柄で華奢な方。しっとりした黒髪の印象もあいまってお嬢様然とした楚々とした容姿だが、控えめを通り越して臆病の域。常日頃から警戒心に溢れている。例えて言えば黒のチワワ。
ただ、その警戒心はあくまでも麻緒を守るためのもので、自らの安全は二の次三の次だったりする。
「マジレス、カコワルイって」
「ネタはともかくとして」
今度は、隣の水上バイクの前席から声がかかる。
波打つ黄金色の髪をなびかせた発育の良い娘。こちらは紗也の双子の姉、絵莉華（えりか）。
「どうよあれ。まずいんじゃない？」
海岸に押し寄せる半魚人達は追い払えても、逆襲に転じて攻め込むことも難しい。背後に控える巨大な背びれはその間にも悠々と北東へ、お姫様のいる浜辺へと向かっている。
「奴らにはこの武器では勝てない……聖なる手榴弾（ホーリーグレネード）とか必要とみたね」
「……??」
またも麻緒のネタが通じていないのか、紗也は首をかしげるばかり。
「やったか、とか言ってる時点でやってないのがパターンだし。がんばってるお兄さん達の首がポンポンクリティカルヒットってのも見たくないでしょ」
「そこんとこ、はげしく同感」
「取材旅行に連れてきてもらった恩義もあるしね……足止めできる？」
「時間を稼ぐのはいいけど」
水上バイクの航跡をぎりぎりまで寄せてきた絵莉華は、右手の

親指をぐっと立て、不敵な笑顔を浮かべる。
「別に、アレを倒してしまっても構わないんでしょ？」
「がつんと以下略！　どうよ紗也、こういうのが正しい反応だからね」
「……わからない」
紗也は興味なさそうに言いつつ、麻緒の後席へと無造作に飛び移ってくる。
「うわっ！　いきなり何すんの!?」
が、意外に揺れない。器用なものだ。
「麻緒は頼んだ」
それだけ言い残し、急加速する絵莉華の水上バイク。
「……当然」
言われるまでもない。
絵莉華が麻緒の剣、麻緒の意志に従い敵を討つ者であるのと同様に。
常に麻緒の傍らにあり、ただただ彼女を守る。紗也にとって、自分とはそれだけのための存在なのだ。

前線を形成する樒Ｂチームの水上バイク群を追い抜いた絵莉華は、ベルトで背負っていた小銃に手をやる。
ほんの一秒前までアサルトライフルであったそれは、彼女の手に渡った途端、一振りの黒い長剣に姿を変じていた。
稲妻をまとうプラズマ球を宿した剣を絵莉華が海面に打ち込むや、先刻からのグレネードに数倍する水蒸気爆発が巻き起こり、十数匹の鮫（ホホジロザメ、アオザメ、オオメジロザメ、イタチザメ、ｅｔｃ．）と、数十体の魚人間達が虚空に巻き上げられる。
絵莉華の水上バイクも同様にはじき飛ばされているが、彼女は空中で器用に体を翻して体勢を立て直すと、鮫を蹴り、半魚人を轢いては勢いを殺し、落水寸前に小さな水蒸気爆発を起こして完璧な軟着水を決めてのけた。
「兄ちゃん達、雑魚は任せたっ！」
金髪と赤・黒のビキニのド派手な少女は、呆然とする樒Ｂチームを置き去りにして、巨大な背びれを追いかけてゆく。
「せめてウェットスーツ着ろ！　お嬢ちゃん！」
その背中に向かってサブリーダーの仁科が怒鳴る、
なにしろ水上バイクのジェット水圧だけでも人間は死ねるのだ。
おそろしく身軽で人間離れした破壊力を持っていても、鮫より頑丈そうには到底見えない。
今の攻防にしても、一歩間違えれば危険生物に引き裂かれる以前に内臓破裂で死んでいる。
「アニスブラボーリーダーよりＨＱ。エクスカリバー交戦中。なんつうか身も蓋もないが、放っておけん。援護が賢明と判断する」
『ＨＱよりアニスＢ、キングアーサーの守りは不要』
「アニスＢ、了解」
司令部を仕切っているのは、キングアーサーこと麻緒の妹と聞いていたが……そのウィザードが言うのだから、安全という確信があるのだろう。
「全力でエクスカリバーを援護する。続け！」
追いすがる鮫に手榴弾を投げ込み、水上バイクに取り付こうとする半魚人に小銃を乱射し、鮫に乗って絵莉華を追う半魚人をグレネードで吹き飛ばす。
一ダースの水上バイクの動きは一件ランダムに見えるが、常に

互いに援護可能な位置をキープし続けている。チームワークに優れたサッカー選手達を思わせる、組織化された動きだ。
「スピードではこっちが上だが、敵は数が多い。鮫より魚人に注意しろ。絶対に取り付かれるな」
自分の鍛え上げた二輪機動部隊は水上戦でも十分に戦える。椦Bチームのリーダー田端は十分な手応えを感じていた。
基本方針さえ与えれば、田端がいちいち指示を出さずとも、刻々と変化するそれぞれの役割を完全に把握している。
彼らがひとたびバイクに乗れば、世の常の鮫やら人間サイズのバケモノに引けをとるものではない。こんな特殊な状況でも、安心して任せられる。
一方、先行して巨大鮫の足止めにかかった炬絵莉華の戦いぶりはといえば、迅く力強く、威風堂々。
そのたる戦いぶりたるや、軍馬を駆って単騎で敵陣に投入する騎士を彷彿させるもので。
とびかかってくる六メートルクラスのホホジロザメに速度も落とさず突入し、これを真っ向から二枚に下ろし。
四方から同時に鈎爪でつかみかかる半魚人を、水上バイクを操縦しながらのカポエラばりの逆立ち回転蹴りで蹴り落とし。
王を守る近衛のように立ちふさがる危険生物群を蹴散らしつつ、巨大なメガロドンへと着実に迫っていく。
その卓越した運動能力も状況判断も、身に帯びた超常能力も、超一流の鬼斬りの域に達していると言って良い。
だが、息もつかせず襲いかかるピンチを次から次へとすり抜けていく様子はといえば、ハリウッド映画ばりの綱渡りっぷりだ。とにかく危なっかしい。
ただ一人の能力だけを頼りに戦うそのスタイルでは、わずかな手違いで取り返しがつかなくなるし、複数人による連携攻撃に対しては対処が困難となる畏れがある。
「突出するな、エクスカリバー！　孤立するぞ！」
田端の心配もなんのその。
弾丸は勇者を避けるとはよく言ったもので。バカげた幸運としか言いようがない偶然の回避が続いているばかりか、危険生物同士の誘爆や相打ちも続発。
格下の相手では近づくことも許されない、と言ったところか。
「なんか、大丈夫そうっすね」
と、前席のライダー。
「……そんなとこまで詩紀様並みか」
五ヶ瀬の坊ちゃんが連れてきただけあって、やはり彼女たちも只者ではなかったというわけだ。
背後を確認してみれば、一台遅れている水上バイクもまた深みの者どもに襲撃されている。
「かかってきなさい！　私は誰の挑戦でも受ける！」
前席の白黒ボーダー柄のカバーアップ姿の少女が中指を立てて吼え、
「舌噛むから黙って」
後席の赤黒チェックのワンピース水着の少女は無造作に右腕をのばし、前席の少女に飛びかかるイタチザメの牙を腕で受けた。
続いて、
四方から次々に飛びかかってくる鮫や半魚人の攻撃を一身に受け、小さな紗也の姿はたちまち埋もれてしまう。目を覆いたくなる光景だ。

が、少女が犬のように身体をゆすると、有害生物たちは全ての武器を失い、欠けた折れた歯や鈎爪とともに海へと転げ落ちていった。

水着は穴だらけになっても肌には傷の一つもないのだから、華奢な見た目によらず相当頑丈なようだ。

「ごめーん紗也、こういう事もあろうかと換えの水着用意してあるからね」

「ん、問題ないわ」

そもそも、鬼使いや鬼憑きや超常能力者なんて連中に常識を求める事自体が間違っているのだが。

司令部のウィザードとてその片割れであるわけで、平々凡々で虚弱貧弱無知無能な常人としては命令に素直に従っておくのが正しいだろう。気をもむだけ馬鹿馬鹿しい。

田端はそう割り切って機械的に任務を遂行する事にした。

そんな間にも、絵莉華と超巨大鮫は対峙に至っている。正確には、メガロドンの方が反転した。背後より追いすがる絵莉華を無視できなくなったとみえる。

この時点で足止めには成功しているのだが。絵莉華にはそれで済ませる気はないようだった。

水上バイクに立ち乗りで黒の長剣を構え、人の背丈より高い三角の背びれを見据える。

RVほどもある頭が浮かび、水上バイクごと丸呑みに出来そうな口が開くと、そこには二十センチメートルをこえる三角の歯が無数に並んでいる。

怪獣、以外の何者でもない。

まともな神経なら即座に回れ右して逃げ出したくなる光景だが、剣の妖精を止めるには至らない。

「当方に迎撃の用意あり！」

絵莉華が叩きつけた言葉に応えるように、新たに二匹のメガロドンが尖った頭を海面に突き出した。

「「……オッオー」」

こいつは結構かかりそうだ、と麻緒は感じた。絵莉華や紗也も同意見のようだった。

「なんと、光鷹（みつたか）高の安南リサ様とは。予想外の超豪華ゲストですなあ」

記録班の腕章をつけ、カメラを手にした一団の生徒達は、光隆学園高等部写真部に籍を置く二年生達。

この時点で、リサを撮るともれなく心霊写真になっている事には誰も気付いていない。幸せなものである。

機材を集めた椰子の木の下に集う彼ら彼女らは、一切表情には出さぬまま、本音をダダ漏らしに小声で話し合う。

「あのヒトほんとに同い歳なのかね。大人っぽすぎ」

「もう一つ朗報。喫茶ハニーポットの慰安旅行とぶつかったみたいよ。浅葱谷のサクラ姫とか三条さん見かけたって噂があるし」

「俺、万戸屋（まとや）の炬姉妹見たぜ。例によって飛成麻緒（ヘンプコード）さんと一緒だった」

「写真は撮ったな？」

「当然」

「グッジョブだ」

「うーん、俺的には商工会の芳村さんが一押しだな。ふふふ」
「こらこら。ダンナと娘いるでしょ。年の離れたすっごいダンディーなおじさまよ」
「一年の睡蓮ちゃんはあの人の義理の娘だよ。それはそうと、中等部の高天萌衣ちゃんとかも来てるのかな？」
「黙れペド野郎」
「サクラ姫がいるなら、聖者扇戸さんも来てるんじゃない？　念願の五ヶ瀬君の水着も撮れちゃったし、ちょっと期待しちゃうわぁ」
「男もどうでもいい」
「ちょっと方向性が違うが、三条さんと良く一緒にいる狩谷楼蘭さんとかもなかなか」
「そうそう、ヘンプさんの妹の麻鈴ちゃんとか、あと万戸屋だと二見美々ちゃんあたり」
「年下にこだわるなお前も」
「なら、うちの中等部の天叢さんとか凄くない？」
「あれは年下として認められないな」
などなどと、侃々諤々の議論に、ふん、と鼻を鳴らす者がいる。
「いや、一人大物を忘れてるな」
「大物だって？」
「うちの会長様だよ。髪染めてから雰囲気変わったろう。ハニーポットのお歴々と十分対抗できる気がするがね」
「いや、俺が聞いた話じゃ、染めるのやめたってのが本当らしい」
「そこはどうでもいい。些細な問題だ」
「あのひと身体弱いとかでいっつもプール休んでるけど。どの辺が弱いのかさっぱりなのよね」
「それで写真が出てこないわけか」
「詩紀様とならぶ、罵られたい美少女の双璧。金角銀角、水着で初のそろい踏みってか」
だが。数分後、彼らの期待は見事に裏切られる。
「「「ふざけんなー！!!」」」
皆から遅れてビーチに姿をみせた、生徒会長こと南山晴蘭は、完全防備だった。
時にチャバネ呼ばわりされるダークブラウンのブレザーは紫城高の制服そのもの。
就任するやいなや、いかにも伝統校らしい有名無実化した校則を、現実に即するよう徹底改正してみせた彼女であったが……
いまや名目上の制帽の地位さえ失ったはずのベレーを身につけているばかりか、濃い色のヴェールに手袋、黒のストッキング、さらにケープに日傘まで装備という、どこから見ても一分の隙もない喪服だった。一片の肌色も見えないという点では、水着とは対極に位置する。南国の白い砂浜には不釣り合いきわまりない。
確かにこれこそが晴蘭の常日頃からの出で立ちではあり、空港でもホテルでも、私服の群れの中ただ一人浮いていたものだ。
だが、さすがにここまでは誰も予測できなかったと見え、皆唖然とするばかり。
「こらぁ、会長！」
いち早く我に返り、進み出たものがいる。
眼鏡を掛けた男子学生は、肩をいからせ、暴力的な正論と辣腕で畏れられる会長に詰め寄っていく。
「B組の永島誉じゃないか」

「会長の事実上のブレインって噂の？」
「その言い方は正確じゃないな」
写真部一の事情通が言う。
「空気を読む以外なら何でも出来る会長殿にはブレインなんか要らんよ。あいつはむしろ緩衝材。カタブツ会長殿を妥協させられる希有な人材だ」
「そういうのは些細な問題だといっとろうが」
「しーっ、聞こえない」
皆が声を潜める中、二人は視線も気にせず対峙する。
「永島君。どうしたの、そんな怖い顔で」
「脱げ！」
誉のストレートきわまりない物言いに、眉をひそめた晴蘭がざざっと距離をとる。
「よっしゃ、よく言った！」
「言ってやれ言ってやれ！」
小声で声援を送る者達。
「それ以上近寄るようなら、性的嫌がらせと判断するけど」
「あんたなんかにセクハラして俺に何の得があるよ」
誉はひょいと肩をすくめてみせる。
「ならば同志か？」
「無いな」
ロリコン的発言の続く写真部員に、別の部員がぴしりと突っ込む。
「では発言の意図についてきちんと釈明なさい。発言の如何によっては然るべき筋に訴えるわ」
機嫌の悪化を反映してか、晴蘭の単語の選び方が明らかに物騒になる。
が、誉の方は慣れたもので、
「老婆心からの発言だよ。そんな格好でウロウロしてると脱水で死ぬぞ。いやマジで」
「暑さには強いから。心配ご無用」
言うだけあって、生徒会長殿はろくすっぽ汗をふく様子もない。
「熱中症を甘く見るな。汗が出ないのはむしろ危険だ。それに、あんたが良くても見てる方も暑いんだって」
「そうだー！」「よく言った！」
ギャラリーの何人かが賛同の意を示す。
「泳ぐ気がないのなら水着になれとまでは言わんが、せめて上着ぐらい脱いだらどうだ」
「……個人的事情よ。忠告はありがたく受け取っておくけど、きゃっ！」
日傘を取り落とした晴蘭が、意外にも可愛らしい声を挙げる。
誉の目配せに、背後から忍び寄っていた影が、生徒会長女史に飛びかかったのだ。
「ごめん会長さん！　やったよ誉くん！」「トラトラトラ、我奇襲に成功せり！」
犯人は白のワンピース水着に赤いヘアバンドのおでこ娘と、小柄なゴスロリ風レース水着の娘。それぞれ片腕をとらえ、足をからめる。
「籐華（とうか）、枝里子（えりこ）ん、協力乙！」
「これは何のつもり!?」
晴蘭は抗議の声を挙げるが、
「ふっふっふっ、しれたこと」

誉はわざとらしく眼鏡の位置を直し、にやりと偽悪的な笑みを浮かべる。
「実力行使だ。緊急避難だから悪く思うな。一色さん、たのむ」
「はい。了解ですよ」
妙に色っぽい少女が誉の背後から顔を出し、両手をわきわきさせながら、殊更ゆっくりと迫る。
「会長さんに含むところはありませんが、他ならぬ誉さんからのお願いですからね。いや別に、決して個人的に楽しんでいるわけではありませんよ」
動けない晴蘭に必要以上に顔を寄せ、ヴェールをめくりあげて顔を撫でる。
「あら、綺麗な赤い目をしてらっしゃるのね」
「ん〜〜っ！　永島誉っ、卑怯者っ！」
身体と表情をこわばらせつつ睨み付けてくる殺気さえ籠もった視線を、誉は目をそらして受け流し。
「男前な晴蘭さんは女の子には手を出せないからな」
とうそぶいてみせる。
何しろ、彼女には何度となく投げ飛ばされている。いいかげん学習もする。
男には一切の手加減無し。下手に目を合わせると呑まれる。
ならば毒をもって毒を制す。空気を読めない面倒くさい女には、別の面倒な女をぶつけるに限る。こういう場合、一色瑞星はまさに最適な人材だった。
「この綺麗なお顔と抜群のプロポーションで、わたしの誉さんをたぶらかそうというのかしら？　困った生徒会長さん」
「一色さん！　離れなさい、今すぐ！」
逆らう事の困難さ故「勅令」の異称を奉られた生徒会長の一喝に対しても、瑞星は小揺るぎだにしない。
「それは聞けないわ。だって私に命令できるのは誉さんだけだもの。ふふふ」
真っ向から視線を合わせての命令が効かない。いや、催眠術にでも掛かっているかのようなとろーんとした目は、最初からか。
「……この娘、危ないわ」
「あんたが言うな」
なにせ生徒会長は、かの新川妹と並ぶ危険人物だ。
誰が呼んだか金角銀角。派手な金髪銀髪に引っかけた上手い例えだと素直に思う。
瑞星は単に態度がヤッバイだけで直接的な危険性には乏しいが、会長や新川妹はただそこにいるだけで危ない類だと、漠然とではあるが誉にはそう感じられてならない。
ただ、そんな会長閣下にも。天敵、というものは確かに存在するわけで。
川崎藤華は永島誉の幼なじみで、ほぼ言いなり。九十九枝里子は誉の親友三橋零の恋人にして、面白そうなことが三度の飯より好き。こういう確固たる信念（？）を持った相手には晴蘭の一喝も効きにくい。しかも、予め誉から言い含められているのか、決して晴蘭と目を合わせようともしない。
そんな二人に拘束されたうえ、まるで話の通じない相手に妙な手つきで撫で回されては、さしもの晴蘭も辟易するほかない。
全身で組み付くだけの単純な拘束方法だけに、二人がかりで仕掛けられては技術で破る事は困難だ。かといって力任せに振り払っては二人を傷つけてしまいかねない。

だが、彼女にも頼るべき仲間はいる。
「まどか！　いつまでも見てないで何とかして！」
親友の名を呼ぶ。水泳で鍛えた大柄な彼女ならば、二人を傷つけることなく拘束を解いてくれるはずだ。
しかし、誉の表情はあくまで余裕で。
「石丸さんなら、もう我慢できないと言い残され、先にあちらにいらっしゃっておりますが」
誉の立てた親指のはるか遠方には、入念な準備運動にいそしむ他の生徒達を尻目に、ものすごい勢いのクロールで泳ぎ回る女生徒の姿。
「あの、図体だけの脳筋……」
そうだ。まどかの行動はいつも単純きわまりない。あんなものを当てにする方がどうかしていた。
その石丸まどかを脳天気なでっかい犬に例えるなら、まとわりついてくる一色瑞星は、人間サイズの昆虫を彷彿させる。
意思の疎通が困難、ではない。根本的に別の理屈に則って動く、意思疎通が不可能な何か。これは理屈では説得できない、と直感する。
「や、やめ！」
その何か、に。晴蘭はケープを引っぱがされ。
「こっちも」
「きゃあ！」
ついで、手袋を奪われ。
「あと、これも」
「それだけは勘弁して！」
ベレーとヴェールまで奪われ、衆目に晒された白磁色の頬がたちまち紅潮する。
「なんかエロいぞ。まだまだ厚着なのに！」
「普段お堅い分、これでも超エロい！」
「敢えて言おう、エロであると！」
盛り上がるギャラリー。携帯電話の内蔵カメラのシャッター音が連続する。
「けっ、決してエロくなどないっ！　解散、解散っ！」
晴蘭はがーっ！　と抗議するが、必死で何かに耐えようとするような真っ赤な顔では、いささか迫力に欠けると言わざるを得なかった。本人が慌てていては「勅令」の効果も乏しい。
「いい加減覚悟決めて、上着は自分で脱ぎなよ」
「脱ぐものですか！　……う、はっ、くっ」
「会長さん？」
「どうしたの？」
晴蘭と身体を接している籐華と枝里子は、彼女の身体の震えと異様な息の荒さにいち早く気付いた。
瑞星が僅かに手に触れただけで、全身がびくっ、と痙攣する。
「身体が熱くなってるわね」
煽るような意味ありげな発言に、ギャラリーの一部が入れ食い。
「そっ、それは性的な意味で!?」
「断じて違う！　っひゃあ！」
瑞星の手が、肌の露出した部をぺたぺたと這い回る。
「これは興味深い反応ですねえ」
「うひ、ひゃっ、きゃ、あひ、ふぁっ!?」
「「おおおっ!!!!」」
「その辺で勘弁してやれよ、一色さん。それに、趣旨を勘違いし

てるお前らもいい加減にしとけおわっ⁉　ぐふぁあ！」
突然宙を舞った瑞星を辛うじて受け止めた誉は下敷きになって転倒。
「あら失礼。これは役得」
「さっさと上からどいてくれ」
籐華と枝里子は二回転後ろ向きにでんぐり返った程度だったが、砂地で無ければ怪我していたかもしれない。それほどの勢いだった。
一度に三人の少女を振り払った晴蘭は、奪われた衣服を慌てて着こんでいく。
奇妙なことに、肌を晒す範囲が減少するとともに、晴蘭の症状は目に見えて落ち着いていった。
「はあ、はあ……ふう」
息をついて顔を上げた晴蘭の視線が、誉のそれと交差した。
身体がこわばる。完全に逃走のタイミングを逸した事を、誉は悟る。
「なーがーしーまー」
「いやあ、知らなかったよ。生徒会長からは逃げられない」
そして、生徒会長はことさら見せつけるように指の骨を鳴らす。
「小生に何の御用でしょう？　会長閣下殿御中」
直立不動で答える誉の台詞は、丁寧ながらいささか怪しげだった。
「これまでも何度となく言った筈よね。直射日光が苦手だって」
「あー、そうでしたっけ？　いえ、そうでした今思い出しました。最近歳のせいか記憶力の方にちょっと問題が」
「素肌が日に当たると、とてもくすぐったいの。それはもう、臆面もなく叫んでしまうぐらい」
先刻の瑞星よろしく、生徒会長は革手袋に包まれた両手をわきわきさせる。
「このいたずら者が涙を流して許しを請う光景、見てみたくはない？　川崎さん、九十九さん。それに、一色さん」
これで形勢は完全に逆転。女子ばかりとはいえ三人掛かりで拘束されては、さして体格に優れているわけでもない誉には逃れようもない。むしろ手加減しなければ三人を振り払える晴蘭の方がバケモノじみているのだ。
「ごめんね誉くん」
「正直興味深い」
「それも楽しみ」
「そういう事なので覚悟なさい」
ながしまほまれはなかまをよんだ！
「護！　零っ！」
しかしだれもあらわれなかった！
「なんて羨ましいヤツ……そのまま地獄に堕ちやがれ」
又従兄弟の護は、肩をすくめて処置無しのポーズ。
「全然嬉しくねえ！」
当たってるとか当ててるとかいう問題ではない。これから待っている地獄を考えると、少女三人に密着されていてもちっとも嬉しくない。
「自業自得だ。これに懲りて、もう妙なことに枝里子を巻き込むな」
剣道部の王子様、三橋零（みつはしれい）は相変わらずのクールっぷり。
頼りになるのは自分だけ、と誉は覚悟を決めた。

かくなるうえは、卑怯者の汚名をかぶるのもやむなし。最後の手段しかあるまい。

「正直すまんかった。調子に乗りました。これこの通り。許してください」

「だが断る」

平謝りの誉を冷たく見据え、ヴェールの向こうで嘲う紅い眼。

やはりコイツは怒らせてはいけない。それは分かっていたつもりだったが、心から理解してはいなかったと誉は悟る。まさに後悔先に立たず。

やがて、阿鼻叫喚の悲鳴が南国のビーチにこだました。

一部始終を見ていた白須詠人と安南リサは、至極もっともな感想をもらした。

「アホだな」

「愚かですわね」

あの生徒会長が喧嘩を売ってはいけない相手だというのは、初見でしかも素人のリサにも分かる。詩紀みたいな濃い生徒達を束ねてまがりなりにも言うことを聞かせるなど、普通の神経や手腕で務まるはずがない。

「だがそれがいい」

「ナナに何かが足りないとすれば、きっとああいうバカっぽさ」

だが、双子の中坊には随分と評価が高かった。

「あはははは」

七夏から見て、どちらの意見にも同意できるところがある。

詩紀の兄である篤史や、従妹のさおり。二人はまさにあの類の人種だ。彼らの発言はしばしば冗談じみていて本音を悟らせないし、端から見ると愚かとしか思えない一見無意味な行動が多々ある。だが、それらはしばしば後から何かの布石として効いてくる。

斗流十家という名家の一員として生まれてはしまったが、人を導く立場の者としては真っ直ぐすぎるのは自分でも分かっている。器じゃない。

ただ、

「永島君のはあまり頭が良い方法とは思えないけど、僕は嫌いじゃないな。愛がある気がする」

「愛ねえ」

詠人が苦笑とともに復唱する。まあ、そう反応されるだろう。

「愛ある限り進軍せよ！」

「ガソリン尽きるまで。ｂｙジョージ・パットリン」

「混ざってる混ざってる」

リサが同じく苦笑ぎみに突っ込んだ。

「ペンペン、愛ってなあに？」

「躊躇わないことさ」

「……よく考えたら、全然解答になってませんわね」

子供の軽口と聞き流したりせず、リサはよく考えてみたとみえる。

「愛、おぼえていますか？」

「ペンギンに愛など要らぬ」

「もしかして、暑苦しいのがお好き？」

相変わらず、この双子は絶妙なコンビネーションで、呼吸をするかのようにどうでもいいネタを乱発する。さすがにこれが何かの布石とはあまり思えない。

そして、先ほどからいちいち突っ込んでいるところを見ると、

リサには全部意味が分かっているのだろう。
まったく、みんなお嬢様のくせにご立派なオタクっぷりだ。
「リンペン説はともかく、ナナ的にはどこらへんが愛だと？」
相変わらず冷静な詩紀の質問で、ようやく話が本筋に戻ってくる。
「尊敬はされてたけど畏れられてもいた会長さんのイメージが、さっきので結構良くなったと思わない？　ああ見えて、可愛らしいところもあるって。あれを狙ってやったのなら、きっと愛のなせるわざじゃないかな」
「可愛くないとは言わないけれど」
詩紀は頬を膨らませ、少しピントのずれた答えを返す。
「愛でなくても、僕にとっては収穫だったよ。それに、さっきは美紀ちゃんの笑顔も見られたし、今度はもっとレアなヤキモチ顔だし」
「〜っっ!!」
「なにっ!?」
詠人とリサが視線を向けた瞬間には、既に先ほどまでの仏頂面に戻っている。
「しまった、見逃した！」
それなりに長い付き合いの詠人にも、詩紀の笑顔なんて記憶は数えるほどしかない。いわんやヤキモチ顔をや。
「……で、ミノリって誰？」
「初耳よ」
もっともな疑問だった。二人の知る旧友は、新川詩紀。美紀なんて名はこれまで聞いたことがない。
「邪気眼系クーデレがしのりんで、シャイなプチツンデレがみのりん」
「二人で一人。身体はおんなじ」
「身も蓋もない説明ありがとう」
どう説明したものかと七夏が考えている隙に、リンペンが見事にぶっちゃけた。
「二重人格というやつですの？」
「そんな俗っぽいものではないわ。樞の依り代たる私と、人としての私。魂が二つあるのだそうよ。それで、便宜的に後者を美紀としてる」
二重人格が俗っぽいかどうかは別として。胡散臭い事は間違いなかった。
「まった、そんな魂とか非科学的な」
「幽霊が言わないように」
おばちゃんっぽく手をぱたぱた振って言う詠人に、リサがばっさり突っ込む。
「……つい忘れるんだよな」
微妙な間からすると、本当に冗談のつもりはなかったようだ。
「あなたこそ、つくづく俗っぽい幽霊ね」
「細かい設定はともかくとして。これまでそいつ見てても、別に二人いるように見えたこと無いんだけどな」
取り憑き相手の愚痴を聞き流し、素直な感想を述べる詠人。
「そうね、もっとジキルでハイドで説得力でお願いしたいところね」
「設定ちがう。エンタメでもないから駄目出しされても困るわ」
「そりゃもっともだけど……」
困惑するリサ達を尻目に、

「たった今、美紀ちゃんになったよね？」
七夏は事も無げに言う。
「その水着だって、選んだの美紀ちゃんでしょ？」
「そっ、そのココロは？」
反応したのはリサ達ではなく、詩紀の方だった。
「詩紀ちゃんならもっとシンプルな、白のワンピースとか選ぶと思う」
「……さすがね」
「ほら、詩紀ちゃんに戻った。正確には詩紀八割美紀二割ぐらいだけど」
「いやいやいやいや、全然分からんから」
「同じく」
詠人とリサは、二人全く同じ仕草で縦にした手を振る。
「慣れればそれなりに区別できるんだな、これが」
「でもさすがにナナの境地には及ばず。あれは神業」
「自分でもどちらが出ているかわからないのに、ナナはなぜか断定できる。ほんと、呆れたものだわ」
「うん、最後に美紀ちゃん入ったね」
顔を見合わせた詠人とリサは。
「なるほど、これが愛か」
「確かに躊躇ってないかもね」
とわけの分からないながらも納得をし。
「上手いぜベイビー。愛だろ、愛っ！」
「たぶん愛、きっと愛」
リンペンはまたも古くさいネタを披露し、
「いっつも仏頂面の詩紀ちゃんが美紀ちゃんみたいに笑えるようになって、僕にも区別がつかなくなる。それが夢だよ」
七夏は大胆にもそう宣言し。
「無謀な挑戦ね。ご苦労なこと。でもそれでこそナナって気はするけれど」
詩紀にさらっと流された。
「さしずめ、今のはしぃ子の方ね」

『HQよりT川、アニスチャーリー。警戒中の米軍より情報提供あり。北北東より飛行生物多数接近。そちらの真上を通るコースだ。状況確認乞う』
「アニスCチーム、リーダーよりHQ。ああ、なんつうか、竜？っていうか、そんな感じのが押し寄せてきてる。確かに、明らかにビーチに向かってるわ」
『HQよりアニスC。交戦許可を与える。武器使用自由』
「あー、もうやっちゃってる。聖剣のお嬢ちゃんが飛び出しちまった。止める間もなく。以下、保護者に代わる」
「とりあえずそちらの流儀に合わせてゲオルギウスと名乗っておく。アスカロンは既に交戦中。一端発動するとコントロールが効かないが、全面的に任せておけば大丈夫だ」
『HQ、了解。ゲオルギウスに一任する。オーバー』
ゲオルギウスこと、扇戸丈司（おうぎとじょうじ）は、樒Cチームのリーダー、新見に無線機を返した。
「あれは正確には飛竜、ワイヴァーンと呼ばれるタイプです。前脚が翼になっていて飛行能力に優れてはいるが、特殊な能力としては毒を備える程度で知能もごく低い。要は、竜に従属する下等

な眷属。ただの動物ですよ。空力での飛行を成し遂げるため体格は華奢で鱗も薄い。さすがに散弾程度では心許ないが、ライフルが当たれば十分ダメージが通るはず。ただし、狙って当てられる距離に近づいてきてくれればですが」

立て板に水と補足する縁なし眼鏡のシャープな少年に、眠たげな眼をしたリーダーは、訝しげに問いかける。

「流石は聖者様、と言いたいところだが。キミはどうしてそこまで竜に詳しいのかね」

「さすがに勉強しましたからね。竜族に不用意に関わるといろいろ洒落になりませんので」

「なるほど」

なにしろ、彼女は竜が絡んだ途端に、まるで常識が通用しなくなる。

「それにしても、ありゃチートすぎだ」

時間を数分戻そう。

上空を通り過ぎようとする飛竜に、

「ボフォースの40ミリなりあればな。米軍が手を貸してくれれば助かるんだが」

と新見がぼやいた。

「こんなところまで進入を許している時点で、彼らに動く気がないのは明らかです。予想進路を連絡した上で、交渉は司令部に任せるべきでしょう」

丈司がこんなところまで優秀な参謀っぷりを発揮し、善後策をはじき出す。

「敵はやる気ゼロ。仕事は君らが全部やってくれる。楽で助かるよ」

軽口を叩く新見だが、ライフルを構える両の手は内心の無念さを反映して震えていた。斗流の武力の一端を担う者としては、敵と見定めた相手からこうも無視されるのは屈辱だろう。

「こっちに向かってきてくれるのならまだしも、スルーされては手が出しようがありませんね」

同じく冷静に言う丈司にしても、気持ちは同じ。

浅葱谷高現生徒会長である彼は、紫城の生徒会とはそれなりに交流もある。

飛竜達が目指して飛ぶ先では、ろくすっぽ身を守る力も持たない学生達が、何も知らぬまま修学旅行を謳歌している筈だ。駐留米軍の司令官は、部下を危険にさらさず島民を守るために、彼らを人身御供に差し出す事を選択した事になる。

そもそも、丈司達は殺到する水の魔物達を食い止めることを期待されてここにいる。

だからといって、飛行する敵の存在を考慮に入れなかったのは痛恨のミスだった。

守るべきクイーンを奪われ、あるいは殺されるような事があっては、持ち場を守りきっているであろう他の黒姫達に合わせる顔がない。

いや、この世界そのものが、樞の統べる新たなる時代へと移行してしまえば、そんなプライドには何の意味も無くなる。

水の魔物、なんてくくりが恣意的なものだ。樞には九頭竜の異名がある事を考え合わせるならば……

「眷属に竜が含まれていても、おかしくないか」

何かが引っかかった。

まさか、そこまで考えてここに彼らを配置したのか。あの少女魔法使いは。

「それでは、会長さんに成り代わりまして、私が」

丈司の傍らに立つ、長身のポニーテール娘のスイッチが切り替わったのが分かった。

南の島というだけで何も考えずに水着（しかもスクール水着）を着てくるような、よく言えば純朴、悪く言えば抜けた娘だが……彼女佐倉明日香（さくらあすか）はその身のうちに一本の聖剣を備えている。

剣としての彼女は自動的で自律的だ。ひとたび竜を感知するや、『竜殺し（ドラゴンスレイヤー）』モードを発動、冷静沈着にこれを屠る。

今回もまた、同様だった。

まずは、落ちていた小石を投擲。衝撃波をまとった弾丸は絶妙な曲線を描いて飛び、一投ごとに数頭の飛竜を一度に撃ち落とす。

彼女を敵と認めた飛竜達がこちらに向かってくると、手近の小さな木の枝をしならせたその反動だけで、明日香は放たれた矢のように宙に舞い上がる。

高度の優位を確保した黒髪の少女は、どこからともなく取り出した巨大な黒い両刃剣の腹で飛竜をなぐりつけ、その反動でさらに宙を舞い、飛竜を踏台にさらに跳び、また別の飛竜を蹴り払い……なんと、まともな飛行手段もなしに空中戦を始めてしまった。

ただ竜という竜を殺して殺して滅ぼす、そのためだけに特化した能力。

新見がチートと称したのは的を射ている。こと竜を倒すという目的のために限っては、彼女は物理法則の改竄さえも行いうる。

そして、目の前のすべての竜を狩り尽くしたところで、彼女は普段の天然娘に復帰するのが常だ。

が、飛竜の全てを叩き落として着地した明日香は、彼女の象徴たる大剣を未だ手放していない。戦闘体勢。

「まだ居るんだな？」

「はい」

単刀直入な質問に簡潔に答えた明日香の見つめる先には、赤、青、緑の三つの飛行物体。それぞれのサイズは大型の戦闘機ほどもあるが、その形態は生物でしかありえなかった。

大気ではなくエーテルをはらんで飛ぶ翼。呼吸運動で呪を為し炎や光弾を生成する声帯。飛竜とは格の違う、通常の物理学・生物学の枠を越えた生命体。

今度こそ紛れもない、本物の竜だった。

「これはさすがに支援が必要だな。新見さん？」

丈司は師からの借り物である童子切安綱を抜刀した。国宝として国立博物館に置かれているのはレプリカでこちらが本物とか言っていたが、真偽の程は定かではない。

「了解了解、聖者様。仰せのままに。お前ら、分かったな？」

「掛かってきてさえくれれば戦いようもあるってもんだ」

「十分引きつけて呪符を叩き込んでやるっす」

「人間サマを舐めるなよ、トカゲども」

聖剣の化身とはいえ、少女一人に戦いを任せることは良しとしなかったのだろう。新見の部下達もまたそれぞれに気勢を挙げ、強敵との戦いへ自らを奮い立たせた。

準備らしい準備もなしにそんな大魔術が可能かどうかは別として。

偶然とは思えぬタイミングで落下した三つの隕石により、北方

の浜辺に迫っていた巨大ヤシガニモドキのうち約半数が撃ち殺され、あるいは活動不可能なまでのダメージを負った。この消耗は軍事的には全滅と言って良い。

事実、組織だった戦闘は不可能となり、生き残った半魚人どもは動けるヤシガニモドキを再編して浜から距離をとり、改めて陣を敷いた。

相手のホームグラウンドが水中である以上、こちらから攻め込むことは自殺行為だ。だが、勝利条件は撃退であって殲滅ではない以上、膠着状態はむしろこちらの望むところである。

ここでようやく一息つけた樒Aチームだが、リーダーである石丸はそこまで楽観的にはなれなかった。

深みの者どもの盟主資格保持者が居るビーチは湾奥に位置しており、湾口は『茨の園』にて封じられている。

海生生物達が彼女にアプローチするには、『茨の園』をものともせぬほどのとてつもない怪物を突入させるか、陸地を飛び越えるか、あるいは北のビーチ（すなわちここだ！）から上陸して砂浜を回り込むか。さもなくば、南の川から上陸して市街地を突っ切るか。選択肢としてはそんなところだろう。

ならば、最も容易く大群を送り込めるここを諦める理由はない。

「おいでなすったぞ」

魚人達が突撃の先頭に押し立ててきたのは、見たこともない魚だった。

魚、というのが正しいのかはわからない。全長十メートル以上、人を丸呑みできるサイズの大きな口には数本の板状の牙が並び。そこらの鮫などよりよほど迫力のあるコワモテっぷりだ。それが何十匹も、肉のついたがっしりとしたヒレでもって遠浅の砂底を這い進んでくる。ここを乗り切ったとしても、きっと一生涯夢に出てきそうな光景だった。

通常兵器でヤシガニ（仮）の殻を貫くのは容易いことではなかった。そこで今回は虎の子の呪術強化弾の使用さえ許可したが、大口の怖魚（仮）の防御力はヤシガニ（仮）を遥かに上回っていた。明らかに魔術的な防御を備えている。そればかりか、ヒレに生えた無数のトゲを打ち出しての遠距離攻撃さえ行ってくる始末。

「ひーん、石丸さーん！」

「パー子うるさい！　口より手を動かせと何度言えと！」

ライフルを放ちながら、使えない花屋娘を叱りとばしつつ、頭を回転させる。

あの容赦ない隕石の打撃でさえ、ヤシガニ（仮）の半数を打ち倒せたに過ぎなかった。より頑丈な怖魚（仮）にどこまで通用するか。しかもあれは危険すぎる。たまたま運が良かっただけで、味方を巻き込まないという保証はない。

それに、いかな大魔法使い殿とて、あんな術をそうそう連射が出来るとは思えない。

「全然効いてないですよー！　なんですか、あの怖い顔のー！」

赤枝千羽を連れてきたのは失敗だった。ただ素人を巻き込んだだけ。赤枝の巫女とはいっても能力を戦闘に使えるとは限らないし、それは千羽の責任ではない。前もって十分確認しなかった石丸の落ち度だ。この娘だけでも安全に後送できるように、司令部から人を送ってもらって……

「恐怖のダンクルオステウス＝テレリ（ダンクル）の骨」

「うぉっ！」

石丸の背後で発言したのは、セミロングの黒髪をシニヨン二つ

にまとめた小柄な少女だった。
真っ赤な蝶のワンポイントの入った黒のビキニに、同色のフリルパレオ。おでこに載せたサングラス、シュノーケルに浮き輪。
完全装備。海で遊ぶ気満々と全身でアピールするような出で立ちだった。南の島の砂浜という場所にはともかく、鉄火場には似合わないことこの上ない。
ただ一つ、左手に持った両刃の黒い長剣だけが異彩を放っている。
人形じみた容姿の少女は、空をつかむような仕草で右手を差し上げた。
「生け捕りにしたら古生物学者が泣いて喜びそうね。でもこちらが化石になるのは願い下げ」
彼女に呼応するかのように、一ダースにも余る細長い物体がわき出す。
少女が手を打ち振るや、それらは尾部から炎を吐きつつ水面を割って飛び、海底へと突き刺さる。一部は怖魚（仮）の装甲された頭に命中し、そのまま尾まで貫いて胴体をミンチに変えた。
「やった！」
石丸の部下達から歓声が上がる。なにせ、手持ちの武器では全く歯が立たなかった相手が一撃で撃破されたのだ。
隊列の乱れた上陸部隊に対し、続いて第二射。またも数体の怖魚（仮）が粉砕されると同時に、何十もの半魚人が衝撃だけではじき飛ばされる。
それを成し遂げたのは魔術ではない。運動エネルギーミサイル。ロケット推進の徹甲弾、炸薬を持たない超高速ミサイルと言っても良い。召喚こそは超常的な手段であるが、最終的には単純に潤沢な物理的エネルギーが、魔術強化された生体装甲を凌いだ事になる。
「『弾薬庫の門』……あんたがデュランダルか」
「へえ、樒の頭ともなると詳しいんですね」
話を続けながらの第三射。
火器管制が行えないため大体の見当で打ち込んでいるだけなので効率は良くないが、それでも確実に深みのモノどもを足止めし、戦力を削り取っていく。精度という点では隕石より実用的かもしれない。
良く訓練された部下達は石丸の命令を待たず、浮き足だった半魚人達に攻撃を加えて海へと追い返しに掛かっていた。
「失礼。司令部の麻鈴から言われて援護にきたわ。私は狩谷楼蘭。こちらは三条樹菜」
もう一人、長身の少女が進み出る。こちらはTシャツにダメージジーンズという真っ当な（？）、出で立ちだ。
「初めまして。わたし、赤枝千羽です」
「あ、こりゃどうも」
いかにも緩そうな娘に握手を求められ、なんとなく応える。サクラ姫みたいなタイプだ、というのが楼蘭の感じた第一印象だ。全然空気が読めてない。こんなところでドンパチやっているよりも、喫茶店か花屋の店員がお似合いだろう。
それはお人形じみた樹菜とて同じ事なのだが、楼蘭の相棒は見た目にそぐわず掛け値無しのバケモノだ。岩さえ断ち切った伝説の剣の力をその身に宿しているばかりか、その名にちなんだ兵器すら無造作に召喚するというデタラメっぷり。あれを一体どこから取り寄せているかなど、考えたくもない。

「この娘、頑丈なもの相手にはめっぽう強いんで。上手いこと使ってやって下さい。あ、一般人の私はマネージャーとして解説役に徹するんで、アテにしないように。くれぐれも念のため」
「分かります。富樫・虎丸ポジションですね」
「……」

島の最高峰、R山の山頂付近の展望エリアには今回の作戦の指揮をとる司令部が置かれ、数十名がひしめいていた。
太い三脚で据え付けられた大型の双眼鏡を覗いているのは、強い癖のある黒髪の少女。こてこてのゴスロリファッションが浮きまくっている。
「私にサービスシーンを期待しても無駄だからねっ！」
小柄な少女は特徴的な吊り目で虚空を見据え、釘を刺すように言う。
「誰に言ってるんだ、フレア？」
傍らに立つ、どこから見ても平凡な容姿の少年が声を掛けた。
「言っとかなきゃならないような気がしたのよ」
自分の行動の理由が分からず、首をかしげながらも、少女は不快そうに言う。
「分かるよ。俺にも時々ある。おそらく魔王のヤツがグリマエルから覗いているのを、魂が感知しているんだろうな」
「はいはい中二病乙」
フレア、こと芳村睡蓮（よしむらすいれん）は、整った顔に嘲笑を浮かべ、めんどくさげに言った。
見た目によらずかわいげのない態度だが、少年、竜胆大輔（りんどうだいすけ）は意にも介さない。彼女が無愛想なのはいつものことだし、必要とあらばお嬢様に相応しい態度もとれる。
睡蓮は双眼鏡での監視に戻る。別にこれを予想したわけではないが、眼にはいるのが鬱陶しくて前髪を短く切っているたのは好都合であった。
「私らの苦労も知らず、いい気なものね。お姫様方は」
修学旅行生の集まるビーチに双眼鏡を向けた睡蓮は、吐き捨てるように言う。
「……いくら腹立たしくても、ビーチを誤爆しないでくださいね。白銀珠比女命（しろがねのたまひめのみこと）一人の安全の問題じゃないんです。人間世界の運命は睡蓮（カタミ）さんの双肩にかかっているんですから」
「へいへい。ダインスレイフよりウィザード、これより封鎖作業に戻りますよ」
二つ年下の魔女っ娘に諭すように言われるまでもない。睡蓮として自分の役割は理解しているつもりだ。
双眼鏡の倍率を落とし、T湾の湾口部に配置された四つのブイが視界にはいるようにする。
ビーチのあるT湾は現在、睡蓮の能力『茨の園』によって封じられ、生命体の出入りが禁じられている。正確には、エリア内に入った生物はことごとく死滅する。
これは呪われた剣としての彼女の力の顕現であり、通常であれば彼女に危害を加えようとする生物を死に追いやる自動的防御機構を担っている。
光学機器を用いて視線を介して力を投影し、遠距離攻撃に転用するというのは、ウィザードこと飛成麻鈴のアイディアだ。
さすがは伝説の魔術師の名を受け継ぐだけの事はあるといった

ところか。

「……ったく、わたしらを顎で使うなんて恐ろしいガキよね」

強力な能力ではあるが、時にマカニト呼ばわりされるように（だれが上手いこと言えと）、睡蓮の力の及ばぬほど強い生命体には無効だ。だが、酒呑童子級の鬼ですら触れずに殺してしまえるのであるから、成体の鯨かそれに匹敵する生物でもなければ湾内への突入はかなわない。

島の南西沖に現れたメガロドンなら茨の園を突破できるかもしれないが、麻緒と愉快な仲間達が交戦中と言うから任せておいて大丈夫だろう。

また、敵味方が混在している場所に対しては使いにくい。誤爆を回避するためにも、力をコントロールできる睡蓮自身が双眼鏡で観察し続ける必要があった。

幸い今のところ、湾内・湾外とも封鎖エリアにまで近寄ってきている人間も船影もない。とはいえ、いつ何時サーファーやボートが紛れ込むか分かったものではない。監視というのは簡単そうに見えて、退屈かつ神経のすり減る作業だ。

大輔の大あくびに、睡蓮がキレたのももっともと言えよう。

「仕事しなさいよ大輔（ダイナス）！」

彼に与えられた使命は、作戦に参加している全員の情報の把握であった。

名前、写真、生育歴。その他諸々、麻鈴がどこからか（おそらく非合法に！）集めてきた情報はスマートフォンに入力されており、大輔はそれを暗記するように言われている。

知らぬ者にとってはまるで意味不明だが、睡蓮には麻鈴の意図がよく分かる。ドリフトによる世界の書き換（リライト）え対策だ。

彼女ら黒姫や新川の姫様のような強力な魂の持ち主は、しばしば世界に干渉しているという。それは見た目には並外れた幸運として働くが、実際には歴史そのものを改変している場合があるのだそうだ。

それが本当であれば恐ろしいことだ。既に死んでしまっていることにされるのは、世界から存在そのものを消し去られる事に等しい。

感知できない睡蓮には中二病の妄想と紙一重にしか聞こえないし、全面的に信用しているわけでもないが……大輔は改変を実感できるという。

歴史を変える力を持つ者にも、書き戻す力はない。書き換え前の歴史を知らぬ者には不可能だ。つまり、麻鈴は大輔にデータセーブ用のバックアップメモリーの役割を割り当てたというわけだ。

「ふっかつのしょが消えたなんて言おうものなら、その頭蓋骨の中の役立たずのメモリを引っこ抜くからね」

「せいぜい努力する」

この直後。米軍が出撃したとの報が司令部へともたらされた。

身体の小さな半魚人達は、本来は河川防御担当の樒Cチームが竜との戦闘に釘付けになっている間にT川を遡って上陸していた。

偶然か狙ってかは分からないが、結果的には陽動作戦となり、彼らは見事にビーチの後背に回り込んだ。

が、T川から詩紀達のいるビーチに向かうには市街地を通過する事になる。そこで、駐留米軍の海兵隊が動いた。

市民に危険が迫る危険性が出てきた途端に腰が軽くなったとい

えば現金なようにも感じられるが、こちらも結果論としては温存されていた予備兵力が適切なタイミングでに投入されたことになる。

しかし。

知事の要請により観光産業への影響を配慮、表向きは緊急展開訓練として少数精鋭でのヘリボーン作戦をとった結果……敵を侮ったツケは現場の兵士が払うことになった。

T川の岸辺は、たちまち阿鼻叫喚の地獄となる。

半魚人は人よりはるかに力が強く、銃弾にもある程度なら耐える鱗を備え、人間並みの知恵を持ち、しかもどこから手に入れてきたのか、銃器さえ扱う。

移動トーチカとも言える巨大ヤシガニ数十体（仮）を引き連れた約二百の半魚人に対し、手持ち武装のみの海兵隊一個中隊では十分とは言えなかったのだ。

「そこの子供！　近づくな！」

戦闘真っ最中の制限区域に迷い込んできたのは、半袖の黒のセーラー服に同色のスカートを身につけた小柄な少女だった。

長い黒髪をツインテールに結った少女は制止に耳を貸さず、アジア人特有の曖昧な笑顔のまま近づいてくる。

「ここは危険だ！」

KEEP　OUTのテープで隔離されているとかの問題ではなく、歩哨の兵が何人も配置されていたはずだ。彼らは何をしていたのだ。

しかも、明らかに戦闘中。敵は謎の半魚人。既に五十人もの海兵隊員が倒れている。

陸軍のチキンどもならとうの昔に敗走しているところだ。無く子も黙る海兵だからこそ、辛うじて保っているという状況。

訓練を受けた兵士でも逃げ出すような戦場に無手で入り込んでくるなど、ひょっとして状況を理解できていないのか？　いや、既に正気ではないのか。

危ぶむ指揮官。

「デイヴ、あの娘を保護して脱出しろ」

「イエス・サー！　デイヴ・スミス伍長、娘を保護して安全なところまで脱出します」

部下に指示を出し、娘に視線を戻した指揮官は目を疑った。

少女の両手にはいつの間にか武器が握られている。黒と白の二本の両刃剣。となると、半魚人どもと戦うつもりなのか。

しかし彼女の武器はいかにも細く頼りない。相当の達人が振るったところで、銃弾でも容易く致命傷を受けない半魚人に対抗できるとは思えなかった。

だが、

「不肖高天萌衣（たかまもえ）。これより海兵隊を援護します」

明瞭な英語で少女がそう宣言するやいなや。

瞬きする間に、景色は一変していた。地面、岩、樹の幹。そこかしこに突き立った黒と白の剣はあたかも無数の墓標のごとく、あるいは垣根のごとし。

意匠は一つ一つ少しずつ異なるが、どれもこれも同じ作り手によるものと確信できる。黒曜石じみた黒の剣にはひび割れのような、陶磁器じみた白の剣には水の流れのような紋様が彫り込まれており、鈍い赤に光っていた。

なんとも美しく、同時に神々しさと禍々さをも感じさせる。自分たちが手にしている銃器が、ただ命を奪うだけの無味乾燥な機

械に過ぎない事を否応なしに感じさせる。
兵士の一人が恐る恐る剣を手に取り。
また別の兵士が、引き寄せられるように剣をつかみ。
ついには、指揮官の少佐までが剣を握っていた。
「先鋒、承ります！　続いて（フォローミー）!!」
疾風の速度で敵陣に飛び込んだ萌衣がフィギュアスケートのように回転し、一度に四体の半魚人を胴切りにして屠った。ついで、ヤシガニ（仮）の鋏を落とし、頑丈な殻を豆腐かバターでも切るように切り裂く。
剣も少女も、その華奢な見た目からは想像もつかない破壊力を発揮している。
そして、海兵達も、脳裏に響く剣の声に突き動かされるままそれを振るい、魚人やヤシガニ（仮）を斬り倒していく。
誰も彼も、自らの果たすべき役割を理解していた。
一方、少しでも剣に触れた魚人は自ら喉を突き、あるいは腹を割いて果てる。自然、剣の垣は危険生物たちの行動範囲を制限し、動きの先読みを容易とする。
「左、走って、そこで反転。突撃」
指揮者よろしく少女の振る剣に反応し、軍隊は一つの生き物のように素早く滑らかに動き、巧みに敵軍の後背を突く。
「一撃入れてそのまま駆け抜ける！」
小さな勝利の女神に率いられた百戦錬磨の兵士達が、一糸乱れぬ連携で怪物達を駆逐していく。胸の空くような光景だった。
十五分の後、上陸した危険生物群は一体残らず殲滅された。
「莫耶（ばくや）よりHQ。海兵隊の協力を得て、迂回をはかっていた別働隊を撃破しました」
『HQより莫耶。そのまま第二陣を警戒されたし』
超巨大な古代鮫は、倒しきれぬまでも絵莉華達と樒Bチームが釘付けにしている。
飛行竜軍団は明日香に片端から叩き落とされ、樒Cチームにとどめを刺されている。
川からの迂回路は、萌衣に率いられた海兵隊が抑えている。
最短距離となる湾口はといえば、睡蓮の茨の園で封印されている。
この状況で、危険生物群は北の浜に波状攻撃を仕掛けてきた。
樒Aチームのうち、満足に戦える者は半数を割り、リーダーの石丸もまた、半魚人の一体が撃ち込んできたロケットの破片から千羽をかばって重傷を負い、戦線を離脱していた。
樹菜はどこからともなく呼び出した兵器で、ヤシガニ（仮）や鮫や魚竜やクラゲや亀や蟹やその他を蹴散らし続けた。しまいには滑走路貫通爆弾（デュランダル）まで投入し、遠浅の砂浜と珊瑚礁を散々掘り返したが……
しかし、味方や自分までも巻き込みかねないクラスター爆弾や熱圧力爆弾までは使うわけにはいかず、仲間の死体を踏み越えて次から次へと押し寄せる危険生物群を追い払いきれなくなっていた。
「彼らはようやく主攻を定めたようですね」
戦況を観察していた麻鈴が、悠長な口調で言う。

「Aチーム、かなり押されてるんじゃないか？」
と大輔。
「そっちに手ぇ貸す？」
「いえ、湾口を確実に守っていてください」
麻鈴は双眼鏡を回そうとする睡蓮を制止した。
「ここが勝負の勘所です。北の浜が抜けると判断すれば、きっと予備兵力を投入してきます。ひとところに集まったところを一気に殲滅できますよ」
と、どこかに二言三言通信する。
「あんた、わざと負けるように仕向けてるって言うのか？」
「はい」
大輔の訝しげな問いを、通信を終えた麻鈴は事も無げに肯定した。
「魔法少女さん、諸葛孔明でも気取ってるようだけど、人の命を焚きつけ扱いってのは誉められたもんじゃないわね」
さすがの睡蓮の口調にも非難が籠もるが、
「そのための竜胆さんです」
ツインテールに黒いとんがり帽子の少女は、大胆にもそう言い放って憚らない。
黒姫の力を総動員して歴史を上書きし、戦死の事実を無かったことにする。もし敵方の強力な魔物によって上書きされたとしても、大輔が各自のプロフィールを憶えていれば取り返しがつく。荒技も荒技。チートの部類だ。
「自分で言うのも何だが、俺みたいな中二病を信じて、上手く行くかもわからない方法に賭けるってのか」
「個人的に投機的な作戦は好みではないんですが、有効なのは間違いありません。それに司令官も承知の上です」
「司令官、あんたじゃないの？」
「とんでもない。私はあくまでも軍師役を自認してますから」
麻鈴は悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「私もみんなと同じ。あの人の心意気に動かされただけ」

「兄さん、私です」
自分が時間を稼ぐと宣言し、砂浜に残った三条樹菜・リン・ダーナは、並みをかき分けて迫り来る危険な海生生物たちの大攻勢を目の前にしながら、遥か遠い日本の兄に話しかけていた。
もちろん、内容はいつもの定時連絡ではない。
「もし私が帰らなかったら、私の部屋のハードディスクを完全にフォーマットして、さらに物理的に破壊して下さい。押し入れの段ボール箱はそのまま万戸屋の飛成麻緒さんという方に渡して下さい。決して中身は見ないで下さいね」
返事を待たずに携帯電話を切り、電源も落としてしまう。
「ローラも身辺整理はしっかりしておいた方が良いわよ」
「大きなお世話だ」
じゅらの奇矯な行動には慣れたつもりだったが、自惚れだったようだ。
「この状況でさらに死亡フラグ立ててどうするよ」
「ううん。今のは死亡フラグの逆、いわば生存フラグと言ったところかしら」
北の沖から侵攻をはかる生物群は、これまでは硬く分厚い殻に覆われた生物を先鋒として押し立ててきた。が、あくまでも主戦

力は半魚人達であった。
　しかし、今回の主力は半魚人ならぬ鱗を備えた半蛸人とでもいうような生き物が数十体。そして、身長五・六メートルに達する巨大な半魚人も十体ほど混ざっている。通常サイズの半魚人達は一歩引いて続いており、彼らに付き随う従者のように見えた。
　半蛸人にも巨大半魚人にも小銃弾など通らず。しかも、半蛸人は身体がちぎれかけたところからでも見る間に元に戻ってしまう。対物ライフルで穴を開けた程度では意にも介さない。見た目こそ高等生物らしく見えるが、プラナリアどころではない再生能力を備えている。
　樹菜が残り少ないＣＫＥＭの一斉射撃を行って半蛸人達を叩いたものの、かろうじて敵味方を選り分ける時間を稼いだに過ぎなかった。もう三十秒ほどもあれば、再侵攻を開始するだろう。
　徹甲弾系であってもＣＳＭ（コンベンショナルストライクミサイル）あたりが使えれば、麻鈴の隕石（ミーティアフォール）なみの破壊力をピンポイントに叩き込み粉々に吹き飛ばせるのだろうが……残念ながらこの辺りには配備されていないようだった。
　そこで彼女は、超大型熱圧力爆弾を多数落として一面を吹き飛ばす、というイチかバチかの策に出ようとしている。
　古文書の伝える蛸頭の九頭類（くずるい）どもがどれほどの超再生力を備えていても、小さな肉片にまで分解されては短時間で元に戻る事は難しいだろう。
「あの痛いやつを信用するのか？」
「私たちは以前にも竜胆さんの記憶からサルベージされているって話ね。確かに、記憶にはないけど、私にはそれを確信できるの。魂が覚えているのかしら。それに……」
　いったん言葉を切った樹菜が、
「ローラが一緒に残ったのも、そのつもりなんでしょ？」
　と水を向けてきたので、
「あんた一人きりでバカでかい爆弾が呼べるとは思えないからだ」
　と返す。
　自慢ではないが、楼蘭はわりと察しは良い方だ。
　樹菜たち黒姫が相性の良い『相棒』を本能的に求めるのは、剣の精としての魂を持つ彼女たちが大きな力を発揮するためには、相応の使い手に当たる触媒を要求するからだろう事は見当がつく。だからこそ、明日香（アスカロン）には丈司（ジョージ）、樹菜（テュランダル）には楼蘭（ローラン）、というわけだ。
「バッテリー、要るんでしょ？」
「ローラのそういうところ、愛してます」
　にっこり微笑む黒髪の美少女に、一瞬どきりとさせられるが。
　違う違う、これはアレ。ただの吊り橋効果、と言い聞かせて冷静さを取り戻す。
「倒錯するならアニキだけにしとけ。いや、アニキもまずいか」
　われながら良い感じに錯乱している、と楼蘭は苦笑せざるをえない。
「……信じるよ」
　こうなったらもう、やるしかあるまい。
「あの中二病男じゃなく、じゅらを、だけどね」
「ありがと。頑丈な私一人ならなんとでもなるけど、ローラがやられたらそうもいかない。モノはなるべく高空から落とすから。発動したらすぐに走って。私もすぐに追いかけるから」
　そこまで言ったところで、背後から声が掛かった。
「……結局死亡フラグ立ててるわよ、議長（テュランダル）さん」

ざわり。
モンスター軍団に動揺のようなものが走り、進軍の速度が落ちる。
黒のスーツのあちこちに金鎖と錠前を多数ぶらさげた、長身の女性。南の島の浜辺に似合わないことこの上ない。
芳村玲韻（よしむられいん）。年齢的にはまだ二十代になったばかりだが、睡蓮の義理の母親にあたる。
「えっ、玲韻さん!?」
「美味しいタイミングだし、そろそろ真打ちが登場の頃合いかなと思ってましたよ」
樹菜は悪戯っぽい笑みを浮かべて言う。
「貴女ともあろうものがどうしてここまで、と言いたいところだけど……これは単純に相性が良くないのでしょうね」
装甲貫通力と面制圧力に優れる樹菜は、整然とした撃ち合いにはめっぽう強いが、味方を守りながらの乱戦は苦手だ。損害を顧みない数押しの突撃を挑んでこられると、どうしても味方を巻き込んでしまいがちになる。
そして、この時には九頭類達はもう再生を完了し、進軍を再開していた。
「一度玲韻（ファル）さんのお手並みを拝見したいと思ってました」
樹菜が一歩引いて、玲韻に持ち場を譲る。
「……加減が難しいのは議長さんと同じなのだけれどね。黒男さんは日本だから、火力も制御性も低下してるし」
そう呟きながら、ポケットから小さな鍵束を取り出し、両肩の錠前を外しにかかる。
「一番、二番解除ってところかしら」
巨大半魚人達の吠え声に、
「玲韻さん、早く早く！」
そのあまりにも悠々とした様子に楼蘭は思わず叫び、樹菜は再び前に出て剣（デュランダル）を構え、玲韻への狙撃を防ぎに掛かる。
「こんな時こそ平常心。暴走させたら島ごと全滅確定なのだから」
聞き捨てならない発言にぎょっとする楼蘭。
「少し掛かりそうですね。とりあえず防御はおまかせです」
と樹菜。
「説明不要で助かるわ」
一つめの錠前が外れたところで、玲韻の波打つ長い黒髪が赤みがかった光を微かに放ち始めると同時に、その髪や服の裾がふわりふわりとなびき始める。彼女の周囲にだけ局地的な上昇気流が発生しているかのようだ。
続いて二つめの錠前が外れると、髪の放つ赤い光はより強いものとなり、火の粉のごとく沸き上がる細かな輝きもあいまって、あたかも熱せられた炭が燃え上がるかのよう。
輝きは差し上げた右手に集まり、渦巻きながら凝集。その内部に映った黒い影が、すぐに黒い剣として実体化する。
神剣レーヴァテインが黒い刀身に赤い光を脈動させると、玲韻の髪もまたこれに呼応して赤く光り始めた。
「これならきっと九頭類も倒しきれるはず」
刀身から輝きの炎が吹き上がるとともに、敵の進軍が止まる。
距離は百メートル弱。先鋒は既に波打ち際に達している。あとはなだれ込んで押し包めば良い筈なのだが、進めない。
先だって珠坂で二千に余る同胞を瞬時に蒸発させた北落師門の炎と同質のものだと理解したのかもしれない。

だが、知っていたところで防げるものと防げないものがある。
これは間違いなく後者であった。
「行けっ！」
横なぐりに振り抜いた長剣からは、長く尾を引く輝きの炎が大きなカーブを描いて飛び出し、波打ち際を疾走、危険生物たちを巻き込んでいく。
種族も身体の硬さも大小も関係ない。一個の生物を燃やし消し去った炎は、それを糧に一回り大きくなり、また手近な別の生物へと取りつく。獲物を捕らえては喰らい、成長してはまた喰らう。飽くなき狩猟本能と無限の食欲をもった肉食獣のごとく振る舞っていた。
事実、炎の一部は十メートルを超えるサイズの獅子の形をとっていたし、また別の一部は狼や猛禽のような姿を象っている。
「……すっげえの」
「素晴らしい火力には素直に感心しておくとして。個人的には、どうやって収拾するのかに興味が」
「さすがは議長さん、良いところに気付いたわ」
鋭い質問を放ってきた生徒を誉める女教師のように、玲韻は人差し指をぴっと立て、
「それが一番の問題なのよ」
などとぶっちゃけて、楼蘭達を不安にさせた。
危険生物だけではなく小魚やプランクトンまでまたたくまに食い尽くした炎は、やがて仲間内での喰らいあいを始めた。
喰った炎は喰われた炎の特徴を取り込んでいき、最後の一体となった時には、何とも表現しがたいとてつもないキメラが出来上がっていた。
「で、あれは？」
嫌な予感をおぼえ、問うと、
「お見込みの通り相違ございません」
「やっぱりー！」
返ってきた答えは簡潔だった。
楼蘭がとび退いた時には、質問するまでもなく空気を読んでいた樹菜は既に脇に退いていた。
案の定、膨大に膨れあがった炎のキメラは真っ直ぐに主の元へと突進してくる。
玲韻は片手平突きでこれを迎撃。
獣の姿は崩れたが、輝きの炎自体は刃の上でより一層に燃えさかる。
「ごめん、錠前掛け直してもらえるかしら。片手じゃちょっと」
一人で収拾できないような技を使ったのか。と楼蘭は呆れるが、助けられて文句を言える立場ではない。こんなものに暴走されても事だ。
「はいはい。可及的速やかに対処させていただきますです」
二人が錠前を元通り掛け直すと、輝きの炎は小さくなり、髪の放つ赤い光も弱まる。
「ありがとう」
微笑んだ彼女が一振りすると、黒い剣も、まとわりついていた輝きも、幻であったかのように消え去っていた。

時間は少し戻る。
詩紀と七夏は椰子の木の木陰に並んで座り、七瀬のリンペンが

リサや詠人と浅瀬で戯れる様子を眺めていた。
相変わらずの仏頂面ではあるが、七夏の心眼をもってすれば口元がなんとはなしに緩んでいるように見えなくもない。
「ねえナナ。さっきから、向こうの方でドンドンわーわー言ってない？」
「観光地だし、花火じゃないかな」
「真っ昼間なのに？　別の方向からも似たような音が聞こえて来るけど」
「この島にはアメリカ軍の基地や射撃場がいくつもあるから。演習とかしているのかもしれないね」
「先ほどからどうも波が不自然だし、海水に赤い色が混じってるような」
「塩分濃度も土壌も生態系も違うからね。日本海と同じとはいかないよ」
「カチカチ山みたいね」
詩紀の冷めた視線が突き刺さる。
「ん～!?　何のことかなフフフ」
これで押し切るのはさすがに無理があるかな。
「……ふぅん、まあいいわ」
七夏は内心胸をなで下ろすが、そんなものはおくびにも出さない。
せっかく楽しみに来たのだ。彼女には何も知らないでいてほしい。
彼女に宿る北斗七鬼の首魁たる樞の眷属達が、詩紀を取り込む事を諦めたとは考えられない。
主を開放し新たに転生させるため、詩紀の命を狙う事さえ考えられる。
つまり本来であれば水に近づくのは自殺行為。こんな海に囲まれた島など問題外だ。
だが、しかし。
修学旅行だというのに彼女だけを珠坂に置いてくるのは七夏的にアウトだ。一人落ち込む彼女の姿を想像するだけでもハラワタが煮えくりかえる。
であるから七夏はあくまでも海外旅行の強行を主張した。
もちろん、詩紀の安全を疎かにするわけにはいかない。
十家会議に諮り、斗流戦力の海外派遣および、一般人の巻き添え二千名までの許容をとりつけた。
ついで、本来は内部粛正部隊である樞の総司令と談判。詩紀個人の護衛用としての戦力使用の許可を得た。
さらに、内閣総理大臣と直接連絡を取り、斗流十家の名のもとに真心を尽くして誠心誠意説得した。
秘密裏に自衛隊を大規模に出撃させるのは難しいというので、手持ち武器ジャンボ機一杯分の手配と国外持ち出しを手配してもらった。
また、他国での戦闘行為が起こった場合の穏健な後始末と、人的物的損害の国庫からの全面補償も認めてもらった。
最後の方、総理は感動で涙声だったが、それも仕方なかろう。
無闇に振りかざすような真似は好まないが、権力なんてものはこういう時に使うためにあるのではないか。
少女一人に霊的加護の全責任を背負わせている国なら、少女の人としての幸せのために傾いたところでそれまでの事だ。
だが樞だけでは不足だ。超自然的な力には、超自然的な力をも

って対抗するのが確実だ。
近接護衛としては七夏自身と七瀬姉妹が当たるとして。総司令抜きの樒の戦力では、鬼の数体は狩れても飽和攻撃には対応しきれないだろう。
そこで、縁あって知り合った者達に助力を仰いだところ、九名いるという黒姫達のうち七名までの協力を得る事が出来たのは僥倖だった。
最悪の場合には脅迫という手段までも覚悟していたのだが、友人としてのよしみか、あるいは同じく強すぎる力を持て余す者への共感もあったのだろうか。彼らは至って協力的だった。
それでもまだ不足だ。保険はいくらあっても十分とはいえない。
詩紀の親友である安南リサを呼んだのは、半分は詩紀の楽しみのためだが、もう半分は詩紀に心を預けられる者を一人でも増やすためだ。
その他にも、詩紀を慕いあるいは畏怖する者を一学年分確保している。彼らはいわば携帯用のバッテリーというわけだ。
術式の中心となる珠坂を遠く離れている以上、本来の力には及びもつかないが……修学旅行の一団の内部にさえいれば、詩紀は樞の名代としての超常能力を発揮できる。彼女が望んで得た力ではないとはいえ、少なくとも身を守るには役立つだろう。
「ふぅ」
我ながら、人の命をまるで焚きつけ扱いだ。鬼の所行、人非人と罵られても甘んじて受けるしかない。
実際、総理にははっきりそう口に出されたが……一般人が七夏の言霊に抵抗できよう筈がない。積極的に使うことは滅多にないとはいえ、九州珠口の力をもってすれば、本来の意志に反した行動をとらせることさえ容易いのだ。これもまた魔王か何かの為しようだろう。
だが、自分が悪役になってそれで済むものなら、むしろ望むところだ。一度ならず二度までも詩紀を絶望させてきた七夏としては、彼女に対しては精一杯の誠意を尽くしたい。誰に何と非難されようと構うものか。詩紀自身に非難されたって構わない。
そう決意を新たにした七夏に、
「ねえ、それじゃ、あれは？」
空を見上げた詩紀が、再び問いかける。
七夏の視野に飛び込んできたのは、不可思議な光景だった。
光る細い糸のようなものが何本も空中に弧を描いており、先端は湾内の海面に消えている。
糸は一本一本が独立して海面上を走り回っているが、何かに引っかかったかのように次々と動きを止める。
「……さあ？」
糸の反対側は、海辺のホテルの屋上へと消えている。
すべての糸が動きを止めた次の瞬間に、それは起こった。
「！」
糸に沿うように色とりどりのアーチを描き、十数本の輝く柱が立て続けに海面へと突き立つ。
次々と起こる水蒸気爆発。
そして歓声。
「うぉーっ！」
「ウッヒョー！」
「ヒャッヒー！」
何だかんだ言って、みんな爆発が大好きなのだ。

「来た来たキターっ！」
「モンスターパニック映画といえば、ラストは爆発が基本」
特に盛り上がっているのがリン・ペンの双子だったりする。
「演出かしら」
「……たぶん、ね」

Wホテルの屋上、ビーチからは角度的に見えない位置に二人の人物の姿があった。
「ったく、無茶しやがって」
眼鏡の男性、陸奥十悟がぼやく。
生徒達の監視を名目にビーチの全体が見渡せる場所に陣取った二人であったが、本来の目的はこれだったわけだ。
こいつはいつもこんなだ。何でも承知の上のような顔をして、ろくすっぽ説明がないままで他人を巻き込む。
しかも、警告も無しに教え子達の頭越しに砲撃とは、非常識にもほどがある。
「無茶？　照準（ロックオン）してからの精密攻撃だから、その非難は的外れと言わざるを得ないわ」
答えた新川さおりは、額から一角獣ばりにねじくれた光る角のようなものを生やしている。
彼女の理屈によれば、先ほどの細い光線は、例えて言うならレーザー照準というわけだ。
だが常識的には、レーザー光線というやつはああも好き勝手に曲がったりはしないもの。
しかも、彼女の放った光は、自ら湾内を探って海中に潜む敵を捉えていた。
あの光は五感を備えているし、ものをつかむ事も、殴ることも切ることも自由自在らしい。当然のように破壊光線として熱量を伝達する事もできる。つまりは、感覚器で運動器で武器。
誤解を承知で例えるなら、触手か触角の一種と思った方が本質に近いのではないか。人間の感覚には光線という形で認識されるだけで、実際にはまるで別のものであるに違いない。十悟はそのように考えている。
そして。
常日頃のさおりは頑なに人間としての技能しか使おうとしない（武器と格闘技術と気闘法だけで、なまじの鬼憑き以上の戦闘能力を発揮するのだから始末におえない）。
一方、今まさに角を生やして光線を操っているのであるから……隣にいるのは新川さおりではなく、四三揺子（しそうようこ）と呼ばれている存在だろう。斗流の奉じる北斗七鬼の一柱である揺（ゆり）が、さおりの身体と頭脳を借りて顕現している状態だ。
十悟のように鬼の力を借りるのではなく、鬼に身体を貸す。これが無茶でなくて、何が無茶かといったところだ。
確かに、その方法なら鬼の力を十全に発揮できるだろうが……元来、鬼の力で鬼を滅ぼすのが斗流鬼斬りの務めであるから、これはいわば寝返ったばかりの敵将に全軍を預けるに等しい。並大抵の神経で出来ることではない。というか正気とは思えない。
絶対にこんな真似はできないし、真似したくもない。彼女の強さの本質は、才能とは別のところにあるのではないか。そういう気がしてならなかった。

目立つメガロドンを三体もぶつけてきた事により、巨体を持つそれこそが茨の園を強行突破するための決め手であると錯覚させられたが、何のことはない。魚人や蛇権（だごん）はともかく、より高位の九頭類（くずるい）にならば、もとより突破は可能だったのだ。

敵の伏兵は、聖地たる湾内にいつでも潜入できる状態を維持していたと考えられる。

北の浜への大攻勢は大規模な陽動。まとめて焼き払われる事も覚悟の上で、黒姫最高の攻撃力を誇るレーヴァテインを引きつけ、貴重な数分を稼ぎ出す。

その間に一気に距離を詰めて、詩紀に肉薄し、目的を達する。そういう作戦だったに違いない。

「七夏さんが新川先生をホテルに配置されていなければと思うと、まったく面目次第もありません」

後に飛成麻鈴は、五ヶ瀬七夏に詳細を報告するとともに、こう言って恐縮したものだ。

だが、七夏自身の考えはだいぶ異なる。

指揮を全面的に委任してあった麻鈴の指揮は、素人の七夏にとっては神業だった。

全ての部隊の動きを図上で見せられた彼は、ただただ唸るしかなかった。

敵の動きを読み、適材を適所に配置し、常に相性で有利な相手をぶつけるという見事な指揮ぶり。樒各チームの特性や黒姫達の個性的な能力をこうまで見事に使いこなせたというのは、名高い名参謀にしてウィザードたる彼女の本領発揮といえるのではなかろうか。

麻鈴は確かに陽動に引っかかって黒姫の全員を迎撃に繰り出しはしたが……七夏の意を汲み、詩紀のいるビーチを戦場にしないという基本方針は堅持していた。物騒な舞台裏を見せてしまっては詩紀を楽しませるどころではないからだ。

ここは麻鈴さえ欺いた敵を誉めるべきところだろう。少なくとも、素人の七夏ごときに文句をつける資格はない。

結果として本拠地をがら空きに見せかけることになり、それが伏兵の吊り出しに一役買ったとも言えるから、怪我の功名といったところか。

七夏にしたところで、麻鈴に誉められる程のことはしていない。そもそも、神でも仏でも諸葛孔明でもない彼にこんな展開まで想定できるはずもなし。嫌な予感に従ってさおりに任せただけだ。彼女だからこそ、海中にはきっと敵が進入していると確信し、秘密裏（？）に敵を見つけ出して見事撃破に成功できたのである。自分の手柄とはとても言えない。

ただ、七夏は一応は詩紀の彼氏と認めてもらっている立場でもあることだし、他の皆よりは彼女たちのことを少しは知っているつもりだ。詩紀の考えそうな事はなんとなく見当がつく。

そもそも、詩紀ほどの知性の持ち主が、自分が太平洋の小島に向かうことのリスクや意味も承知していないはずがない。

九頭類や蛇権・魚人といった九頭竜の眷属達とて、ある意味では詩紀の信者なのだ。彼らがひとたび詩紀の支配域に足を踏み入れるならば。詩紀にさらなる力を与え、また彼女の影響を強く受けることは想像に難くない。詩紀が何かを強く願うなら、眷属達の行動やその結果さえ左右する可能性が十分ある。

ならば。櫺や麻鈴や黒姫達がどれほど回避に力を尽くしても。もしも彼女自身がそれを望むならば、ビーチでの直接戦闘は避けられないのではないか。

斗流十家の一員の立場としても、七夏自身の思いとしても。詩紀の特異な能力が白日の下に晒されかねない状況は、万難を排して回避したい。

そこまでの事態には陥らずとも……彼女を崇め求める怪物達による襲撃などと誰に想像できるはずもないだろうが……ただでさえ畏怖され一目置かれている詩紀が奇妙な出来事の中心近くにいたならば、それを結びつけて考えるきっかけとしては十分だろうし、彼女の立場をさらに微妙なものにする原因となりうる事は想像に難くない。

詩紀の騎士を自認している七夏としては彼女を守って戦うことも辞さないし、自分が矢面に立って皆に敬遠されても許容できる。彼女の加護があるなら、七夏の能力とは関係なしに勝利は揺るぎないだろう。だが、それで彼女まで敬遠されてしまっては意味がないのだ。

さらに言えば、人間社会の中での孤立は、ヒトとしての新川詩紀（イコール美紀）の後退につながる。樞の名代を自認する詩紀にとっては、これはある意味では望むところでなかろうか。人にとけ込むことより畏れられることを望む、あるいはそう望むべきだと頑なに思いこんでいる。

彼女の正体を知ってなお親身でいてくれる数人がいればそれで十分。そしてその数人が彼女と並び畏怖の対象に列せられるなら、隔離されることによりその絆はより強まる。いかにもひねくれ邪気眼娘の詩紀が考えそうなことではないか。

考え過ぎかもしれない。杞憂で済めば重畳。だが楽観など出来ない。

詩紀の干渉をはね除けつつ騒ぎを起こさずに索敵（サーチアンドデストロイ）と破壊を成し遂げられるとすれば彼女以外にない。そう判断した七夏は、対策をさおりに一任した。これは幼少時からの刷り込みによる妄信だけに頼った行動だったが……やはりさおりは只者ではなかった。根拠レスの無茶な信頼にここまで完璧に応えられてしまっては、かえって怖い。怖すぎる。

そしてそれより怖いのが詩本人紀だったりする。秘密裏に企みを巡らして彼女の望みを蔑ろにしたわけだから、ただで済むとは思えなかった。

もとより拗ねられるぐらいは覚悟の上だが……

「命があればいいなあ」

彼女が能面の裏で激怒していた場合、珠坂に戻った詩紀が本来の力を取り戻した途端、七夏が消滅しても不思議は無いのであった。

修学旅行終了後。彼らが珠坂へ帰還して約一週間の後。

今回の護衛作戦に参加した櫺各チームのリーダーと黒姫達、そしてその関係者を貸し切った喫茶店まで呼びつけた詩紀は、遅れはしなかったにせよ最後の最後にあらわれた挙げ句、薄い胸を張ってこうのたまわった。

「大儀でした。皆の働きをもって、ただの人の子のように旅行を堪能できました。我、白銀珠比女命に命を捧げて戦った全ての者に感謝の意を示します」

なんとも居丈高な感謝もあったものであるが……宗家たる詩紀に無断で戦力を動かしていた上に、それを全部見透かされていた七夏としてはそうそうキツイことも言えない。

「……詩紀ちゃん、できればもう少しソフトに」

「おかげで、実に痛快で優雅なひとときを過ごさせてもらったわ。この場を借りて、ありがとうと言わせてもらうわね」

あまりソフトになってはいなかった。

が、

「恐れ入ります」

「別に礼を言われる筋合いでは」

「うっす」

樒の各チームリーダーである石丸・田端・新見の反応は、丁重だが感情のこもらない、あるいは投げやりなものだ。相手の態度は関係なく、形式的に応えているだけといった様子だ。

十家の中枢にある詩紀達は彼らにとって礼を尽くすべき相手ではあるが、状況によっては狩るべき対象にも変わりうる。斗流に忠誠を尽くすがゆえに命懸けで詩紀を守りはしたが、粛正部隊という彼ら本来の立場としては、いつ本物の鬼と化すか分からない相手とは必要以上に親密にはなれないのだろう。愛想良くしろと言うのも酷だ。まあ、詩紀もそこらへんは理解しているはずであるし、機嫌を損ねる心配はないだろう。

一方、黒姫のうちでも詩紀や七夏と直接の付き合いがある萌衣あたりは心得たもので。

「光栄です」

と、にっこり笑ってそつなく返した。いつも思うが、萌衣にしろ兄の寛彰（ひろあき）にしろ、中学生にしては人間ができている。

「優位を誇示する態度に包まないと満足に感謝も表せないなんてね」

それほど人間のできていない睡蓮は、眉をしかめてそう言い放ち、

「言っておくけど、別にこっちだってお姫様のためにやったわけじゃないわ。五ヶ瀬さんがどうしてもって仰るから、恩を売っておくのも良いかと考えただけよ」

と、言い訳のように付け加えた。

そうは言うが、七夏がここ〝ハニーポット〟で黒姫達に話を持ちかけたとき、最初から特に協力的だったのが彼女だ。

北斗の鬼と剣精黒姫の一角、種類は異なれど人の手に余る力を与えられてしまった同士。自分の立場に重ねてしまったのだろうか。

あるいは、ツンデレはツンデレを知るといったところかもしれない。そういった意味では、詩紀とリサのウマがあったのも納得できる。

と同時に、睡蓮の相棒である竜胆大輔にはいっそうの親近感を憶えた。あの娘を相手にするのは、詩紀と同様にかなり疲れるだろうから。

「ナナに協力してくれたのなら、それは私のためを思って行動したのと同じよ」

詩紀は臆面もなくそんな事を言ってのけた。七夏の行動は常に詩紀のため、と言っているもの同じだ。これはさすがに照れる。

「はいはい、ごちそうさま」

「私は見ていただけですけど……丈司さんの働きが詩紀さん達のお役に立ったのなら、私も嬉しいです」

素直すぎる明日香は率直にそう語る。
ドラゴンスレイヤーモードを発動した彼女が無意識に竜種を倒して倒して倒しまくっていた事を知る新見が複雑な表情を浮かべるが、〝面倒ごとは自分がかぶるからそういうことにしておいてくれ〟と言わんばかりの丈司の視線を受けて肩をすくめる。
「ん。今回は結構ハードだったけど面白かった。甲冑魚やら古代鮫やらを生で見られたのも美味しかったし。麻緒の新作本のネタもだいぶ確保できたんじゃない？」
これは絵莉華。麻緒が親指を立て、ニッと歯を見せて眼鏡の奥で笑う。
「なんにせよ、これだけの面子が動いたというのに誰も死人が出なかったのは僥倖でしたね。私達も斗流のお姫様も、結果オーライなら笑ってすませられますし」
と樹菜が言う。至極もっともだ。みんな思いのほか積極的に協力してくれたとはいえ、身体の傷を残すのも心の傷を残すのも避けたい。
「お言葉だけど……死んでるわよ。八十人ばかり」
玲韻の無造作な発言に、皆が絶句し、場が静まりかえった。
そして考える。それぞれの知り合いには怪我人はいても、死んだものはいない筈だ。
「睡蓮ママ、どこからそれを？」
切羽詰まった顔で大輔が尋ねる。常に余裕を演出したがる彼にしては珍しい事だが、気持ちは七夏も同じだった。
「いや私のママ違うから。義理だから義理……まさか、あんたのママになるとかふっふふふざけたこと考えてるんじゃないでしょうね」
睡蓮がテンパりはじめるが、ママの方は落ち着いたもので。
「なんでも、兵員輸送中のＣ－１３０が竜巻に巻かれて落ちたそうよ。戦闘には完勝できたけど、一歩間違ってたら帰りにああなってたと思うと、手放しでは喜べないわね」
幸い、彼女の話はそこまでだった。
「驚かせないで」
慌てて親友の無事を再確認した紗也がため息とともに漏らした言葉の前半が、皆の意見を代弁していた。
「麻緒さえ無事なら大差ないけど」
本当に極端だが、彼女の優先順位はぶれない。さすがエクスカリバーの鞘だけある。
「だが、芳村女史のご高説ももっともだと思う。ただ道を歩いていても常に危険は存在するものだからな。我々は常に幸運に感謝すべきなんだろう」
神に、でないところが丈司らしい。
目が合った七夏と大輔は、小さく頷き合う。
さおりによれば、世界に干渉して自分に好都合な運命を引き寄せるというのは、魂を持つ生命体としては普通のありようなのだそうだ。
しかしその規模は魂の格によって差があり、強力な高位の魂を持つ者達であれば過去に定まった筈の歴史さえ大幅に塗り替えられる。それは普段は無意識下に行われているが、意識してある程度自由に世界の有り様を選択する事も可能だという。
北斗の頭の星鬼の魂を宿す詩紀はいわば人工の神だし、伝説の剣の精としての魂を持つ黒姫達にしてもある意味で神のようなものだ。

だが、いかに彼女らであっても、この世界に住む人間の脳の認識力を越えることはできない。特に鋭い樹菜や、黒姫としての覚醒度の高い玲韻であっても、なんとなく気に掛かる程度がせいぜい。

であるから、例え自分たちがそう望んで歴史を書き換えたとしても。輸送機の墜落が、より親しい八十余人の死と辻褄を合わせるための犠牲である事を知ることもできない。今この世界に生きる人間にとっては、記憶と歴史は相同であるからだ。

だが〝尚書〟憑きの竜胆大輔においてはその限りではない。彼にとって、世界も歴史も常に変動し続ける不連続で不安定なものだ。そして彼が知る限り、八十名の死は間違いなく起こった事実だ。

憶えていないのならいい。それは幸せなことだ。

野外を歩いているときに何匹の虫を踏みつぶしたかを知ってしまっては、心優しい者はうっかり外を歩くこともできなくなる。

食肉加工場の内情を知る事により、せっかくの料理の味が損なわれ、犠牲となった動物の価値をかえって貶める事もあるだろう。きれい事を言っても始まらない。限られたリソースを奪い合ってぶつかり合う以上、生きるということは同時に他者を侵害することだ。

魔王が世界を掌握しようとするのも勝手だが、人々が勇者を擁立してそれに抵抗しようとするのも当然の為しよう。彼は抵抗する側だが、暴虐な魔王の存在を否定するものではない。ただ、全力を持って討ち倒すだけだ。親しい者達を守るために。ひいては自分の満足のために。

幸い、亡くなった八十名が歴史から消し去られる事はなく、彼のバックアップ記憶が必要になることはなかったが……それは何の救いにもならない。

改変に関わったのは新川詩紀と七人の黒姫達。

彼らは親しさだけを基準に、残すべき命と引き替えにすべき命を選択した。それは宇宙と自然の摂理にすぎないが、彼らが罪と感じれば罪になる。

はじめて出会った頃、睡蓮の心は壊れかけていた。『茨の園』を無意識に発動し、自分が死をまき散らしている可能性に気付いた故だ。罪の意識と不安がさらにコントロールを悪化させるという悪循環に陥り、彼女にとっても街にとっても危険な状態だった。

ただ一人の黒姫でさえそんな具合だ。七人（彼にとっては時に六人）の黒姫と斗流の総帥に自責の念を植え付けてしまっては、珠坂どころか日本が、さらには地球にどれほどの悪影響を与えるか分かったものではない。個人的にも凹んだ睡蓮を見せられるのは御免被る。

知らない方が良いことは沢山ある。ただ大輔が口をつぐんでいれば済むことだ。

だが、一人にだけは、彼の知る全てを伝えた。

全ての責任者。この作戦を発起し、あらゆる状況を整え、音頭をとった者。大輔に歴史のバックアップとともに、語り部の役割をも託した者。

五ヶ瀬七夏は経過全ての把握を断固として望んだ。

失われた八十予の命が何の引き替えであったか。結びつけて考えられる者は彼と、罪を知ることを望んだ七夏以外には居ない。

同じ秘密を共有する者がいれば、それだけで少しでも心が軽く

なるものだ。知っていて口を噤んでいるという大輔の罪の意識を軽減する、五ヶ瀬七夏はそれさえ考えていたのかもしれない。
「大輔君には貧乏くじを引かせてしまったね。申し訳ないと思ってる」
そう言って謝る彼は、それでも微塵も後悔はしていない。それがはっきり分かった。
修学旅行自体が無かったことにする事もできたが、それは七夏が望まなかった。
彼の目的は、一人の少女を笑わせる事。ただそれだけのために、これだけの無茶ができる。
罪の重さを知ってなお、それを否定する手段を持ち合わせてなお、逃げずに正面から結果を受け止められる。
大きい、本当に大きい。
女みたいな綺麗な顔をして、心は実に強靱だ。神経がカーボンナノチューブ製に違いない。
あの新川詩紀の恋人が務まるだけのことはある。彼女も彼女なら彼氏も彼氏、というわけだ。
このバカップルは絶対に敵に回したくはないものだ。と、切に思った。自分と相棒のことは棚上げにして。

さらに一月の後。
「婚約!? あの石丸が?」
ソファーでくつろいでいた芳村黒男(よしむらくろお)は、妻の端的な報告に、彼としては珍しく驚きを露わにした。
「……信じられん。相手は誰だ?」

石丸は樒の総司令である黒男の右腕と言っても良い。真面目で能力も高い男だし、容姿も優れている方だが、理想が高すぎるのか浮いた噂の一つもなかった。
黒男自身、公私ともに的確にサポートしてくれる妻の存在には本当に助けられている。石丸も良いパートナーを得てよりいっそう仕事に集中できるようになれば、樒の力は一段も二段も向上するに違いなかった。
が、まさかウホッでもあるまいし、と心配した黒男が何度水を向けてみても、
「いえ、いつ死ぬかも分からない自分にはそんな資格は」
と、彼は頑なに一人を貫いていたものだ。
難攻不落の石丸城を陥落させたのが何者なのか。黒男は他人の個人的事情には淡泊な方だが、職務上の立場としては当然として単純に興味が沸く。
「花屋の赤枝千羽さん。黒男さんも会ったことあるわ」
「……」
一度でも会った人物の名前と顔が一致しないのは彼にしては珍しい。どうもイメージが弱くて、なかなか思い出せなかった。
「新郷町の商店街の、あの地味っぽい?」
この派手な妻と比べては、大抵の娘が地味になってしまうが。それを抜きにしても、可愛らしい容貌の割には印象に残りにくい人物だった。
「石丸さんは先月の詩紀さん護衛作戦に参加していて大怪我されたでしょう。彼女に真摯に看護されて、ほだされちゃったんだそうですよ」
「企んだな?」

「何をです？」
「……玲韻まで志摩やさおりの真似事を始めるとは、世も末だな」
「お志摩さん達を引き合いにしてもらえるなんて、光栄ね」
姉とも慕う二人の名を聞いた玲韻は、そう言って心からの笑顔を浮かべたのであった。

Swimming Suit Battle

春屋アロヅ

夏休みも半ばを過ぎた頃。昼前にのそりと起きた美紀は、視界の端にちかちかと何かが光っているのに気付いた。携帯に佳奈から一本のメールが届いていたのだ。

『プールリゾートのタダ券四人分もらった！　明日行かない？』

明日は特に用事がない。とりあえず賛成のメールを送って、顔を洗いに部屋を出た。

「あ、寛美さん。おはよー」

「おそようミキ君。もうお昼前だよ？」

顔を洗ってリビングに出ると、食卓には両親の代わりに兄と兄の彼女が座っていた。付き合いだした頃からよく家に出入りしているから、なんだか違和感がない。

「母さんは？」

「買い物。パンでも食っとけ」

「おー」

トースターにパンを入れて一分。

「もう？」

早々と出して食卓に持ってきた美紀に、それを見慣れない寛美が思わず言った。

「表面だけ焼けてるくらいがいいんですよ」

「見たことなかったっけか？」

「ううん。だってミキ君が朝食べてるところに来たのは初めてだもん」

二人の会話を聞きながら、バターをざくざくと塗って口に入れた。そこに兄の浩太が尋ねた。

「お前、明日ヒマだったよな？」

「いや、さっき用事が入った」

「用事？」

「学校の友だちとプール行ってくる」

「「ほう？」」

二人の返事が重なった。ん？　と顔を上げると、何やら顔を近づけてこそこそ話をしている。

「……何だよ」

「水着は？　もう持ってる？」

「いや、ないから後で買いに――」

「わかった！　そこはお姉ちゃんに任せて！　バッチリ似合うのを見立ててあげる！」

「は!?」

突然立ち上がって高らかに宣言した寛美に、美紀は猛烈に嫌な予感がした。そういえば浩太は明日の予定を聞いていた。身近すぎて寛美が朝から家にいることに何の疑問も持っていなかったが、そろそろライブも近いし、衣装のことを打ち合わせに来たのか。今日のうちに何軒か見て回って方針を決めて、明日は美紀を引っ張って行くつもりだったのだ。

そこまで考えが至った頃には、二人とも美紀はそっちのけでぼそぼそと話を進めている。聞こうと思えば聞こえるが、聞き耳も立てたくない。戦々恐々としながらパンを片付けた。

「……じゃあオレ買い物に……」

「あ、もう行く？　おばさんがお昼の買い物に行ったから、食べてからにしない？」

「いや一人で行くから――」
「ダーメ。せっかくなんだし、かわいいの選んだげる」
にっこり笑う。義姉の優しい笑顔に、美紀はため息と共にあきらめた。

女の子の買い物だから、と、買い物に出たのは美紀と寛美だけだ。普段なら二人で行動するのに緊張感を覚えたりすることはないが、今日ばかりは何が起こるかわからない怖さと緊迫感が全身を包んでいる。
実際問題、寛美は美紀で楽しむことに躊躇はないが辛い思いを強いるつもりはないようだし、一緒に行くわけではないのだからとんでもない水着を買わされても着なければいい話で、そこまで恐がることではない。それはわかっているのだが、買うとなれば当然試着をしないわけにはいかない。
日頃男だと自覚して行動し、衣類は下着以外すべてメンズを着ている美紀だが、水着はやむなく女性用のものを着る。ただ、女の子らしさを押し殺したいのは普段着と変わらないから、せめて極力地味で目立たないものを選んでいるのだ。
それを一番理解して、なおかつライブやステージでは反対方向の女らしい服を着せようと画策するのが浩太と寛美だ。そういう特別な日が絡まなければごく自然に男として扱い、相談にも乗ってくれ、精神的に誰より頼れるのもその二人であるから始末が悪い。そうそうブチ切れることもできないのだ。
さて、近場のデパートに入ると、寛美はニコニコしながら美紀を水着売り場に連れて行った。
「よかった、まだセールやってるよ。……って、ミキ君すっごい嫌そうな顔」
「マジで嫌です」
「プールに行くんだから買わなきゃいけないんだし、せっかくだからいいの買わなきゃ。雅ちゃんも一緒に行くんでしょ？」
「行きますけど、別にそれとこれとは関係――」
「ほらほら、これとか可愛い！」
ぶつぶつ言いかけた美紀をまるっと無視して寛美が手にしたのは、朱色がベースのビキニだ。布地は結構少ない。
「あー、寛美さんそれ似合いそう」
「何言ってるの、あたしじゃイマイチだよ。ミキ君が着るの」
「無理無理無理」
首を振る美紀の肩をがしっと掴んで、体に当ててみる。少し体を離して「んー」と唸ってから、次の水着に。
「これは？」
「これは……誰が着るとかなく微妙じゃないですか？」
「ん、そうかもね。じゃあ……こっちは？」
「ていうかなんでビキニばっか!?」
「ミキ君お腹細いし脚長いし、出していった方がいいってば。あ、これとか」
「ド却下です。ほらあっち行きましょうあっち」
ついに肩紐すらなくなったセレクションに恐れをなして、美紀は寛美の腕を取ってワンピースが並んでいると思われる方に引っ張っていった。
三十秒で後悔した。
「ほらほら、これならワンピースで超かわいい」
ドット模様にフリフリたっぷり、リボンベルトまで付いた水着

を押しつけられ、ついでにいつの間に確保したのか、ビキニも一つ持たされて、試着室に入れられた。
「着替えたら言ってね」
「うう……」
　呻いても仕方がない。大人しく来ているものをぱぱっと脱いで着替えた。
「いーっすよ」
「はーい。あ、いいじゃんいいじゃん。すっごいかわいいよ。中も着てる？」
「はあ、まあ一応」
　ワンピースだと思ってハンガーから外してみたら、中にビキニが入っていたのだ。その上にスカートの短いワンピースを着ている格好だ。
「脱いで脱いで」
「いや、いいじゃないですか脱がなくても」
「ダメー。せっかくいろいろ使えるタイプなんだから、ちゃんと見なきゃ」
　業を煮やしてワンピースをめくろうとする寛美を抑えて、渋々脱いだ。
「わー、やっぱミキ君きれいだよねー」
「何言ってるんですか。自分は超スタイルいいのに」
　どちらの言うことも間違っていない。美紀はやせ形で体の凹凸が薄いから、女子にしては背が高いことと相まって普段の言動から余計に男性に見られがちだが、ビキニを着ればそれなりに女性らしく見える。一方の寛美は、身長も女性の平均くらいで体の凹凸がはっきりしているから、水着を着れば男女問わず衆目を集めるのは間違いない。
「んー、ま、とりあえずは次々」
　納得したのかしていないのか、しゃっとカーテンを引かれた。次は気付いたら持たされていた、モノクロームのビキニだ。色も落ち着いているしフリルも目立たないが、トップスの中央に大きくリボンが付いている。それでも仕方なく着替えてみた。
「もーいーい？」
「どぞ」
「オープーン。ふーむなるほど」
　寛美はさっきと一転して難しい顔になる。その理由は美紀もわかっているから、やっぱりね、と思うだけだ。
「これ絶対寛美さんが着た方が似合うと思うんですけど。オレ胸ないからこういうデザインだとしょぼく見えるし」
「んー……色的にも合うと思ったんだけどな。確かにこれならさっきのの方がいいね」
　とりあえず普段着に戻る。寛美は水着を二着とも店員に渡してしまった。
「とりあえずあのワンピースの方はキープね」
「ひょっとして他の店も見るつもりですね？」
「もちろん！」
　女性の買い物とはこういうものだ。自分ではこういう買い方はしないが、雅の買い物に付き合って、よくわかっている。美紀は楽しそうに次の店に向かう寛美に、大人しくついていった。
「ただいまー」
「ただいま」

寛美は自分の家のように挨拶をする。それを聞いて、浩太が迎えに出てきた。
「おう、おかえり。どうだった」
「一応セパレートだし、お腹も出てるし、確かに似合ってはいると思うんだけど……」
なんとも煮え切らない返事に、浩太は眉をひそめた。
「おい、どういうことだ？」
「んー、お互いの主張の妥協点を見いだしたというか」
「意味わかんねえって」
「ちょっと着て見せてあげてよ」
「ヤですよ。なんで兄貴の前で」
美紀はそそくさと逃げ出した。あれから数軒回った中で、唯一見つけたショートパンツ付きの水着で押し切ったのだ。セパレートタイプだが、寛美がセレクトするビキニと違ってトップスが大きめで、胸元が完全に隠れるのだ。せめてパレオにして、という寛美に「隠すなら一緒でしょ？」と強引に会計を済ませてしまったのだ。妥協しきれない時は勢いで押す、とは佳奈から学んだ対処法だ。
これで泳ぐ前は上にTシャツでも来ていれば何の問題もない。場所を決めて水に入る時だけTシャツを脱げばいいのだ。水着に関して、自分の中でそれなりに妥協点を見いだせるのは珍しいだけに、美紀は達成感とともに戦利品を袋から出した。
翌日、佳奈に水中でショートパンツを脱がされて大騒ぎすることになるとは、夢想だにしていないのだった。

魔法少女と魔法と少女

Fukapon

少女の目の前には、少女と思しき黒い塊があった。
「ねえ、あなた、大丈夫？」
道ばたに横たわる彼女の顔は真っ白。夕刻の薄暗さの中ですら、漆黒の布に覆われた首下と強いコントラストをなしている。
彼女の周辺だけ、アスファルトが黒い。
てらてらと光る布と合わせて考えるに、濡れているのだろうか。
「ねえ、返事してよ」
桂川月（るな）は改めて声をかけると、少女の前で屈んだ。
彼女の頬におっかなびっくり手を伸ばしたとき、白い肌の理由に目を見開く。
「し、死んでるっ？」
血の気がない。
触れた頬は、まるで今朝触れた水のように冷たい。
「え、ええええ、きゅきゅ、きゅきゅしゃ。救急車よ、け、携帯どこだっけ」
背負っていたデイパックを降ろすと、口を全開にして中をまさぐった。
「ああ、あああああああー、どこよ、もうっ。出てきてよっ」
大して物が入っていないはずなのに、肝心な携帯一つが出てこない。
そもそも今日、携帯を忘れてきたのかも知れないと嫌な予感が鎌首を擡げたとき。
「あの、何かお困りですか？」
月の背後から女の子の声。
やった、救急車を呼んでもらおうと彼女が振り返ると、立っていたのは少女だった。
「え、ええええっ？」
「ど、どどどどうしました？」
大声を上げて驚く月に、大声で呼応して驚く少女。
月は大まじめに、もはやあり得ない回答を続ける。
「だって死んでたんじゃ……」
「誰がです？」
「あ、あなた？」
「いえいえ、私は生きてますよ。ちょっと倒れてただけです」
未だ血の気のない少女の顔が、にこっと笑みに変わった。
なるほど生きている。路上にへたり込んだままの月は、改めて少女を見上げた。
首下の漆黒は、どうやらマントのようだ。裾からはぽたぽたと、水が滴り落ちている。
「でも、このままでいたら本当に死んじゃいそうな寒さですよね」
少女はケロッと言い放ちながら、首元で手をごそごそと動かし始めた。
程なくしてバサッと音を立て、濡れたマントが落ちる。
「これで大丈夫、っくしゅん。うー、脱いだら脱いだで寒いのです」
露出した肩を抱きながら、くしゃみを繰り返す少女を見て、月はすっくと立ち上がる。
「水着じゃ寒いに決まってるでしょ。ほら、これ着て」
彼女は着ていたピーコートを脱ぐと、少女の肩にかける。

なんて格好をしているのだろう。そう思うよりも前に、肩を抱いて歩き出した。
数歩行ったところで置きっぱなしに気付いたデイパックを拾ったとき、そのポケットからころりと落ちたのは携帯電話だった。
「ちゃんと持ってたのね……」
月は苦笑しながら、少女を抱き直して帰途へと戻った。

「ふー、生き返ったよー」
ノックもなくバンと開け放たれたドアから、桜色に染まった少女が入ってきた。
お風呂上がりで血色もよく、前開きボタン留めのパジャマに収まっている。
「ありがとうございます。えっと、あ、名前聞いてなかった！」
月は少女に釣られて笑みをこぼしながら、読んでいた本を置き、座っていたベッドから立ち上がった。
とてとてっと歩み寄ってくる少女の、長すぎるパジャマの袖を折り返しながら自己紹介。
「どういたしまして。月よ、桂川月」
「ルナ、ありがと。素敵な名前だね。お月様みたい」
「そうね、そのまま漢字で『月』というのは正直ちょっと痛いけど」
「え、あ、そうなんだ。月ね、それはちょっと痛いね」
自虐的に言い放つ彼女を、少女は空気も読まずに肯定すｒ。
笑顔そのままのカラッとした物言いにこそ、むしろ苦笑しながら問うた。
「言ってくれるね。あなたのお名前は？」
「鈴木麗華だよー。華麗じゃないから麗華だよー」
これまた曇りのない口調。
確かに華麗ではないけど、キュートで元気な女の子だ。
言動も含めて考えるに、小六か中一か、その辺だろう。
「麗華ちゃんね、よろしく。そのベッドに座っていいから」
月が指差したベッドに、麗華は早速飛び乗った。ぽんぽんと跳ねるたび、真っ白なシーツが襞を作っている。
「麗華、呼び捨てでいいよー」
これではジュースをこぼされかねないかな。ちょっと不安になりながらも、月は机の上に用意したマグカップを差し出した。
「これ、飲む？」
「なになにー？　あ、オレンジジュース！　飲む飲む、麗華大好きだよ」
麗華は早口で答えている最中にも、シュッと彼女の手から引き取ってコクコク喉を鳴らしながら飲んでしまう。
「ぷはー、ありがとー」
マグカップを離した顔にはうっすらオレンジのお髭ができていたが、ぺろりと舐め取りお掃除完了。
そんな麗華に感化されたのだろうか、月は前置きもなしに口にする。
「どうして、ずぶ濡れで倒れてたの？」
「魔法、失敗しちゃった。てへ」
ぺろっと舌を出しての答えは、想像だにせぬものだった。
「え？」
にょっと首を前に突き出す月。
（今、魔法って言ったよね？　そんなに幼くは見えないんだけど

……）

少々扱いに戸惑いながらも、当たり障りなく改めて問うた。

「そっか。どんな魔法に失敗しちゃったの？」

月は麗華を笑顔で見つめながら、彼女の左側に腰掛ける。

まるで姉妹のような雰囲気なのは、彼女が麗華をそう見ているからだろう。

しかし、麗華の方は突如、妹のようではなくなった。

「みんなそう言うんだよね。でも、本当だから。えーっと、私の持ってた鞄は？」

「鞄？　ああ、はいこれ」

再び立ち上がった麗華は、部屋の隅に立て掛けておいた小さなショルダーバッグを渡す。

受け取った麗華が鞄よりシュッと取り出したのは。

「ちなみにこの杖の仕組みは、別に魔法じゃないから」

前置きをして小さく振り下ろした黒い棒。

彼女が杖と呼ぶそれは、三つ折りにして格納されていた。振り下ろすとパタンパタンと勝手に接合部が合わさり、五〇センチほどの棒になった。

（確かにこれは魔法じゃない。棒にゴムを通してるんだよね）

これを魔法と言わないあたりが、彼女の「魔法」に多少の真実みを持たせる。

月は少しだけ、麗華に注目した。

「月、よーく見ててね」

もはや不要な言葉を投げると、麗華はくるりと、杖で小さな弧を描いた。

――パタッ

虚空から、毛足の長い白絨毯の上に小箱が落ちた。

「ポッキー？」

「そうだよ、麗華の大好きなお菓子」

彼女は足下のそれを拾い上げると、当然のようにパッケージを開ける。中から出てきた、チョコレート色の棒は確かにポッキーなのだろう。

早速一本咥えた麗華は、取り出したもう一本を月に差し出す。

「月は、好き？」

「うん、好きだけど……」

彼女は受け取ったそれをじっと観察した後に、ちょこんと囓る。

「あ、ホント。ポッキーだ」

「でしょでしょ？　これで魔法をわかってくれたよね？」

月の反応に目を輝かせて、ずいと迫る麗華だが、月の方は釈然としない。

「うーん、魔法と言うより、手品？」

「違うってば！　魔法なの、魔法」

「そ、そう？　じゃあ魔法でいいや」

「ぶー、月、信じてないでしょ？」

言葉だけでなく、その見る目にすら魔法を信じていない。

あからさまな月の様子に、麗華はちょこっと膨れたが。

「魔法使いって珍しいものでもないのに、みんな受け入れてくれないんだよねー」

人々の反応はいつも変わらない。信じてもらえないのはいつものこと。麗華は気にせず杖を折りたたみ、バッグの中にしまい込んだ。続けてショルダーベルトを割とある胸の間に通し、整えている。

「え、帰るの？」
「はい、あまりお邪魔しちゃうのも悪いかなって」
予期せぬ疑問にきょとんとする麗華を、月は今なお、意外そうな目で見ている。お暇しようとする彼女を引き留めたかったわけではない。
「パジャマで帰るの？」
「あ。そうですよねー、着替えないとねー」
月の指摘に照れたように笑う麗華は、鞄から再び杖を取り出し、折りたたまれたままにひょいと振った。
――バサッ
足下に落ちてきたのは、折りたたまれた黒布と、紺色のスクール水着だった。

†

間もなく放課後。
学校中で清掃が行われるこの時間、なぜか生徒の幾ばくかが雲隠れするのだが、月は大多数と同じく、割り当て区域にいた。
「うん、今日もいい感じね」
清掃を終えた女子トイレを眺めて、彼女は満足げに清掃器具を片付ける。
多くの生徒に忌み嫌われるトイレ清掃だが、月は入学以来二期連続、希望してトイレ清掃を担当している。
洋式便座のトイレ故に不可解な汚れは少なく、ゴム手袋に加え清掃用作業着まで支給される唯一の区域。彼女に言わせれば、悪くない清掃区域なのである。
「さーてとゴミを捨てましょう」
独り言に小さなメロディをつけながら、ゴミ捨て場へと向かう。
清掃中の廊下、昇降口を抜けて。掃除をサボる生徒のメッカ、裏庭を歩く。そこで今日も、鼻歌を止める。
――シャー……
放水の音。
何が起こっているかは見るまでもない。
月は引っ提げていたゴミ袋をその場に置き、水たまりのできたその場へと駆け寄った。
「今すぐ止めて」
強い調子の科白とともに、月は二人の女子生徒の間に立ちはだかった。
同時に、ライトブルーの作業服は濃色へと染まっていく。
「何を？」
月が対峙した少女は不敵に微笑む。小首を傾げると、明るいブラウンのロールヘアが弾力を持って揺れる。
「水を止めて」
「掃除中よ？　水を使うのは当然のことじゃない？」
ホースの蛇口を絞り強めた水流を、彼女は月に浴びせ続けている。
「そう。なら掃除を続けて。私は彼女を保健室に連れて行くから」
ついぞ顔面に水を浴びながら、平然とした月の表情は変わらない。視線を目の前に据えたまま背後に手を伸ばし、冷え切ったもう一人の少女の手を握った。
「あら、岡部さんの掃除は免除？」
「顔が真っ青なのよ？　何よりもまず、保健室に連れて行くのは

当然のことじゃない？」
「そうね。好きにしたらいいわ」
放たれた言葉とともに、月を打つ水流が強まる。
少女は歪んだ表情の中に、嘲笑を浮かべた。
一方の月は、正面の少女など意に介さず、背後の濡れ鼠の手を引いた。
「行こう」
真っ青な顔は俯いたまま、頷くこともない。そのまま、彼女に手を引かれて歩み出した。
水を撒く少女から離れ、水流の的が顔から肩、背中へと移り。今日も全身、上着どころか下着までしっかり濡れてその場を離れようとしたとき。
「ぐえ」
背後の声が、突如くぐもった呻きを上げた。
月が振り向くと、彼女と入れ替わるように、見覚えのある顔があった。
「喧嘩なら麗華が買ってあげるよ。喧嘩の売れ残りがあればだけど」
彼女は言葉を切る前に、ホースの根元へと視線を飛ばす。
無邪気な笑顔だけだったならば、その意味を誰も理解しなかったかも知れない。しかし今、彼女の足下には、まさに右足の下には、形のよい頭がある。
すぐさま水は止まり、麗華は足を外した。そのまま屈むと、目の前の少女に手を差し伸べる。
「保健室、行く？」
少女は麗華の手を取ることなく、かといって手を払うこともできずに、己で立ち上がる。
泥だらけになった顔に浮かんだ瞳は涙を流すでもなく、ただ突然のことにおびえていた。視線が差し伸べられた手の方を向くことはない。
「ぶー、麗華のこと無視しないでよー」
麗華は実に不満げに言いながら、中等部らしく膝丈のスカートをたくし上げる。
露わになった白い肌には、不釣り合いな黒のガーター。スッと伸びた細腕がその内腿から何かを引き抜くと、手首でくいっと振り抜いた。
パタンパタンと黒い棒ができあがる様を見て、月がようやく声を上げた。
「やめて、それ以上はやめて」
「だぁめ。痛いことはしないけどね」
麗華は月の声に答えながらも、すでに虚空に円を描いている。
程なくして、泥だらけの少女に変化が起こった。
「え？　えっ？」
戸惑ったような声とともに、彼女の足下には水たまりができる。
水源は、足を伝った上流、スカートの中。
「麗華だからお漏らしで済んだんだからね。もうやめた方がいいよ」
彼女は半ばパニックに陥る麗華から視線を外すと、途端に笑みを消す。
次の瞬間、月たち二人の方に向けられたのは無表情だった。語気も冷たい。
「次は麗華も怒るからね」

昨日とはまるで別人の彼女に月は戸惑うも、声をかける前に彼女は去って行った。

「麗華事件」が学校中に広まるのに、数日とかからなかった。

おしゃべり好きな女子校故、それだけならば麗華も月も驚かない。しかし、事態はそれだけで済まなかった。

――アドベントカレンダー殺人事件、イヴに狙われたのはお漏らしの君

月の目の前に置かれた学校新聞には、派手な見出しが躍っている。

「月はどう思う？」

まだ人が残る高等部に、モーゼが如く人を割ってやってきたのは麗華だ。

誰もが麗華から離れようとする中、月は今日も、微笑みとともに彼女を迎えている。

「どう思うって、どういう意味？　どうして私に聞くの？」

「本当に起こると思う？　って意味だよ。月だって疑われてるんだよ？　気にならない？」

熱っぽく語った麗華がポケットから取り出した紙には、確かに書いてあった。

――二十四日、野原美羽（みう）

この一週間、日付と名前だけが書かれた紙が、学校中から発見されていた。

三日目まではその数もかなりのもので、不可解なものとされていたが。ふと誰かが気付いてしまった。

名前を書かれたものは必ず、事故に遭っている。

「ねえ、麗華」

月は予告状から視線を外すと、麗華を見据える。

「何か知ってるの？　あなたがやってるわけじゃないんでしょう？」

夕闇迫る教室の中、月の表情はついに、険しいものとなった。

一方の麗華は、未だ笑顔を保っている。しかし、その口調は、まるで美羽と対峙したときのようだった。

「知ってるよ。月が麗華を、魔法を信じてくれるなら、止められる」

彼女が言い終えると同時に、教室は色めいた。

月は周りに飲まれることなく、険しい表所のままに席を立つ。

「わかった。麗華を信じる。魔法は、わからないけど」

「ありがと。それじゃあ、来て」

麗華は再び道を開くと、麗華を連れて学校を出た。

サイズオブスクール水着

なぎ

様々な家から持ち込まれた色とりどりの制服たちに染みついた臭い、それを打ち消すように芳香剤の香りが広がっている。芳香剤の香りを嗅いでいると仕事中のモードになるのか不思議と集中できる。集中しているのは仕事じゃなくてゲームなんだけど。この時間は外出中に店に寄るクライアントが減って、授業が終わって売買情報が入ってくる時間には早い谷間の時間帯だから基本的に暇だ。

長らくメンテナンスなんてしていない自動ドアが引きずるような音とたてて開いた。呼鈴代わりにしているドアが開いたら接客の準備をすればよいのだ。「いらっしゃいませなんて」言わなくてもいいのもこの商売の利点の一つかもしれない。常連か冷やかしか確認するために少し入り口を見てみるとＯＬ風の女が入ってくるのが見えた。休憩モードだった気持ちが切り替わり警戒感が顔を流れこわばるのを感じた。女はスーツを着ておりＯＬというよりも秘書風で、この商売の敵の警察官にも見えたからだ。

女はブース内にいる自分の方に向かってくることなく、堅い表情で何かを探すように商品を見ていた。

「何かお探しですか」

いかに怪しくてもお客様として扱うのが俺のポリシーだ。単に使い分けるのが面倒だというのもあるが。

「あれだな」

女は水着コーナーに掛けられた一つの水着を指さした。

「旧スクール水着ですか」

「旧スクール水着というのかあれは」

商品の情報量がこの商売の価値なので商品知識は滑るように出てくるものだ。

「以前は広く学校で使われていたタイプの水着で、現在でも採用している学校の生徒から買い取った本物で非常に価値があるものですよ」

説明を理解してくれたかはわからないが女はうなずいた。

「なるほど、良くはわからないがこちらが必要としている情報は満たしているようだな。その水着をいただきたい」

「なぜ水着を買われるのですか」

商品を誰が買ってどんな風に使うのかは考えないのもこの商売のポリシーの一つだが、素朴な疑問が出てしまった。

「そうだな、説明するのが難しいのだが薬が効果を発揮するメカニズムを知っているか」

「詳しくは知りませんが、体や細菌の因子に働きかけることで機能するんでしたっけ」

「わかってるなら早いな。私たちが探しているのは世界の敵を倒す因子だ」

女が語るには彼女は魔法少女のような存在で以前は物理的に敵を倒すことをしていたが、適切な因子を使用することで効果的に倒すことができることが判明してからは因子を捜索することが仕事になっているそうだ。

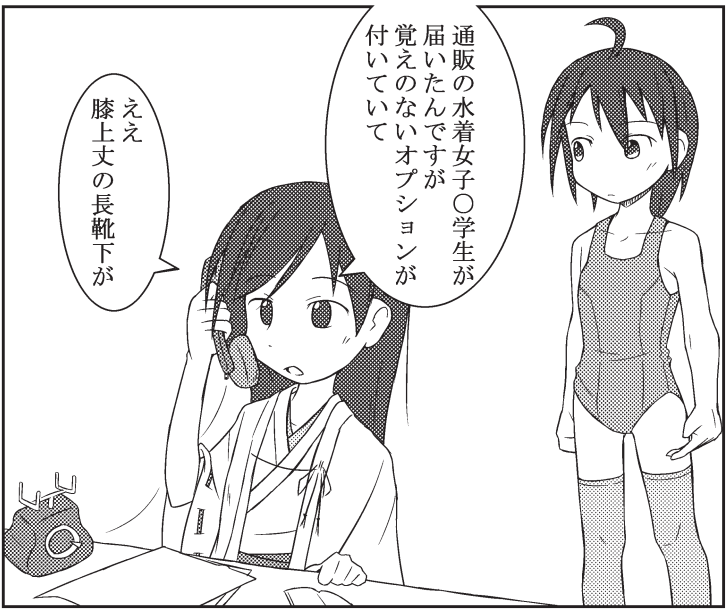
「つまりはその水着が今回の敵の因子として必要なのだ」

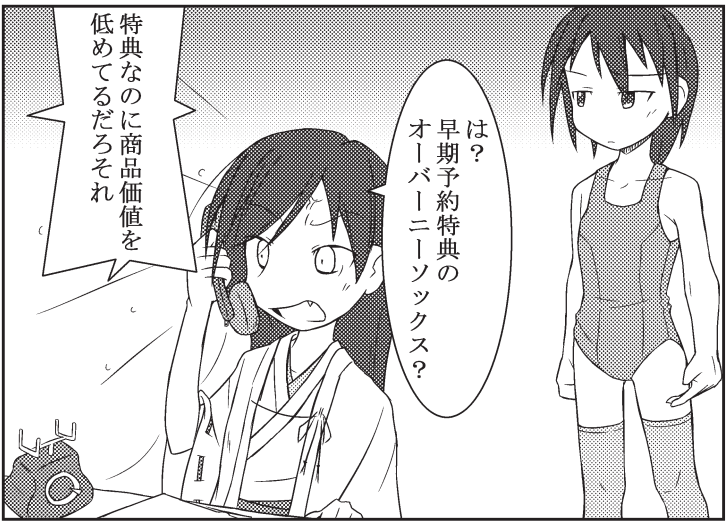
「えっと、こちらの商品ですが一万円になります」

女（魔法少女といった方がいいのだろうか）の語ることは信じられないが、値札を確認して商品の金額を伝える。

「当然ながら私はこの世界の金品を持っていない」
女は商売の基本を覆すようなことを言い放った。そんなことをドヤ顔でいわれても困るのだが。
「しかし、代わりにお前の願いをかなえることができる」
「どんな願いでも良いのか」
続けて提案して来たが俺は半信半疑だった。何せ秘書風の自称魔法少女が言うことだ。
「願いと言っても私がかなえられるのは何かに生まれ変わりたいという願いだけなのだ」
「生まれ変わりか。芸能人や支配階級でもいいのか」
話を少しはあわせてみることにした。生まれ変われるのならこんな商売はせずに楽に暮らしたいものだ。
「理論上はどんな存在でも可能だが、今回は時間もないので。そうだな、あの水着の学校の生徒にしてやろう」
生まれ変わるにしてももっとましな提案があるだろう。たとえば金持ちとか金持ちとか。
「そういっても時間もないしお前と因果のありそうなものがそれくらいしか思いつかなくてな」
こんな店で働いているが女子学生になりたいという希望はない。
「そんな提案は受け入れられないな。金を払うかあきらめるかどっちかにしてくれ」
これ以上妄想につきあってはいられない。すると女は思い出したように言った。
「一つ説明を忘れていた。敵にとりつく因子と同時に大量の情報量を送る必要がある。あたりには他にだれもないのでお前を転送することにした」
何を言っているのかわからないが非常に危険なことは理解できた。
「お前という存在はいったん消滅するが、再構成して生まれ変わるから安心しろ」
そんなこと言われて納得できるわけがないだろ。消滅するってことは死んだも同然だ。
「説明不足は認識しているが時間がないので転送を開始させてもらう」
「お、おい！やめろ」
女が発音できない言葉を発すると自分は白い光に包まれて段々と意識を失った。
「あんな縁がなさそうな男でも意外と情報量を持っているものだな」
ところ狭しとおかれていた制服や水着達がなくなってガランとした雑居ビルの中には変わらずＦＭラジオが流れていた。古びた自動ドアを鳴らして魔法少女は立ち去っていった。

兎角亀毛　Lagado


通販の水着女子〇学生が届いたんですが覚えのないオプションが付いていて
ええ膝上丈の長靴下が


は？早期予約特典のオーバーニーソックス？
特典なのに商品価値を低めてるだろそれ

12月に走れば間に合う？

川鵜鶏肋

ラスト１ヶ月、仕事が忙しくて死にそうでした。気がついたらもういつ雪が降ってもおかしくない感じに。落ちなくて良かったー。今回はプロットが出た瞬間にタイトルが決まっていたので助かりました。いっつも最後に頭を悩ますんですけどね。例によって過去作とリンクしております。よろしければまとめて読んでやって下さいませ。

春屋アロヅ

〇学生ではなく高校生ですが……だ、だめ？

http://third.system.cx/

Fukapon

またやってしまった……。しかも姫カットに続き、本当に、全く、推敲していません。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。ちなみに冬コミの衣装も未着手。来年と言わず、来週からいろいろ考えたいなぁ。子を殺されて笑ってる親はいないだろう？

http://www.fukapon.com/

な ぎ

テーマは数が多すぎて難しかったですね。といいつつテーマを守れておりません。テーマを聞いたときは夏前だったのでちょうどいいと思ってましたが今は部屋の中が寒すぎる。次回は発刊時期に合わせたテーマにしましょう。

Lagado

「二ーソックスと生太股の境でむっちりと強調される肉付き」を愛好する者を敵視する意趣ではありませんが。

http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/

レイアウト

入稿の手引きの加筆を忘れてた。次こそ。
元気だったら次から、絵文字入れられるようにします。って言っちゃった。

http://www.projectkaigo.org/

NEXT VOL11 MAY 2013

mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしておりますよ。
「５年前も５年後もここにいるよ」系サークルにもほどがある、全く変わってねぇよ！てことで、新風大募集。

若返りの薬

とゆーテーマで次の作品を募集中。。
２０１３年５月発行予定。もう COMITIA はないかも。
締め切りは当日００時、だいたい０２時ぐらいまでは楽勝。
コピー本だからさ、ノリで書きましょうよ。

http://www.projectkaigo.org/

詳細はそのうち、ウェブで告知します。
やり損ねた５周年企画とか考えようかな。

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 10
今こそ買い！ 水着〇学生

2012年11月18日　初 版 発 行

発行所　まにふいくみやはか
http://www.projectkaigo.org/

印刷／製本　project KAIGO

Copyright © 2012 川鵜鶏肋，春屋アロヅ，Lagado，Fukapon，なぎ，まにふいくみやはか
この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/ をご覧ください。